

国際協働学習

iEARNレポート

2024年度

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構（JEARN）

2025年6月1日発行 ISSN 2434-0049（オンライン）

2024年度 国際協働学習iEARNレポート 目次

番	題 名	所 属	報告者代表氏名	頁
	プロジェクト実践編			1
1	デジタル時代の国際防災教育 ー 阪神・淡路大震災から30年。高校生からの提言 ー	神戸市立葺合高等学校 京都大学防災研究所巨大災害研究センター 防災世界子ども会議 2025 in KOBE	茶本 卓子 中野 元太 岡本 和子	2
2	デジタル時代における大正琴プロジェクト&琴リンピックの国際協働学習 ー 新しい持続可能な成長を目指す大正琴プロジェクト&琴リンピックー	大正琴プロジェクト 琴リンピック実行委員会 琴リンピック実行委員会 防災世界子ども会議	広田 元子 琴源（金子 秀樹） 琴源心（今井 真美） 納谷 淑恵	7
3	The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project ー コロナ禍後初の五輪・パラリンピック、パリ2024ー	文京学院大学	滝沢麻由美	9
4	Machinto – Hiroshima/Nagasaki for Peace ー 今、この時代に広島・長崎が語り継ぐことは何か ー	青山学院大学	勝又恵理子 岡田 麻唯	11
5	GOMI on EARTH ー ゴミの長い旅ー	青山学院大学	岡田 麻唯 勝又恵理子	13
	小学校実践編			14
6	豪州日本語クラスとのThe Teddy Bear Project ー 交流校の訪日学校訪問までの1年ー	文京学院大学 大田区立馬込小学校	滝沢麻由美 豊島 英明	15
7	Global Learning Circles: Hello Worldの実践 ー 非同期型交流で国際協働学習の入り口に立つー	世田谷区立千歳小学校	長谷川早百合	17
	高校実践編			19
8	探求学習・“Girl Rising Project”の実践 ー 「女性の人権」と「質の高い教育」を目指してー	啓明学園 中学校高等学校	関根 真理	20
	大学実践編（含Youth Project）			24
9	KOSKO Future Teachers Projectの実践 ー 未来の教員たちによる国際グループの挑戦と課題②ー	明治学院大学	長谷川早百合	25
10	小学校国際協働学習（TBP）を支援する大学生の関わり ー ユースプロジェクトとして大学生の学びー	金沢星稜大学	清水 和久	27

<https://iearn.jp/iearn-report/index.html>

ISSN 2434-0049

プロジェクト実践編

デジタル時代の国際防災教育

－ 阪神・淡路大震災から30年。高校生からの提言 －

神戸市立葺合高等学校 茶本 卓子

京都大学防災研究所巨大災害研究センター 中野 元太

「防災世界子ども会議 2025 in KOBE」実行委員長 岡本 和子

近年、気候変動による自然災害が激甚化する中、地球規模での防災意識の醸成を図ることは、今までになく重要になっている。「防災世界子ども会議」は、国際協働学習を通して、防災について考え、課題解決に取り組むことにより、災害に強いまちづくりを担う、未来の市民を育成することを目的に活動してきた。この度、この活動の20周年に至り、これを記念する特別企画として「2025 in KOBE」を開催。神戸市の高校生が国内外に向けて活動発表・ディスカッションを行った。国際協働学習にフォーカスした国際防災教育を通して、変動するグローバル社会に貢献できる人材の育成を目指している。

阪神・淡路大震災の教訓 災害リスク軽減 国際協働学習 国際防災教育 国際防災デー2024

1. はじめに

「防災世界子ども会議(NDYS: Natural Disaster Youth Summit)」は、阪神・淡路大震災から10年、神戸での第2回国連防災世界会議 パブリックフォーラム(2005年1月)参加を機に始まった、iEARN(アイアーン)プロジェクトである。



「NDYS 2005 in ひょうご」 宣言文の採択

2005年3月、プロジェクトの成果発表として、第1回「防災世界子ども会議 2005 in ひょうご」国際会議を開催。世界11の国・地域からユースが集い、防災について学び合いながら「今日を防災について考える出発点として、防災について学び、感じ、共有しよう!」という宣言文を採択した。世界で起きている災害による被害を、世界のユース間の交流・協働学習を通じて、軽減し、未来の災害から人々の命を守るプロジェクトとしてスタートした。

2025年3月、多くの方々のご尽力を賜り、この国際会議が20年目を迎えられたことに心からの感謝を申し上げたい。

2. 防災世界子ども会議 ロードマップ

国際枠組と関連付け、持続可能で災害にレジリエント(強靱)な社会に貢献する人材育成をめざして取り組んでいる。

これまでに世界65の国・地域の学校・チームが参加している。

本稿では2025年3月22日開催の「防災世界子ども会議 2025 in KOBE」について報告する。

3. 目的と方法

阪神・淡路大震災から30年、防災世界子ども会議設立20周年を記念した「防災世界子ども会議 2025 in KOBE」を、神戸市立葺合高等学校を会場として、3月22日にハイブリッド開催した。



図2. チラシの表面

4. 活動内容

4-1 成果発表会概要

事業名：防災世界子ども会議 2025 in KOBE

日時：2025 年 3 月 22 日

会場：神戸市立葺合高等学校（ハイブリッド開催）
タイトル：阪神・淡路大震災から 30 年。高校生からの提言 ユースがつなぐ「防災の未来」

会場参加者：60 名

オンライン参加者：世界 10 の国・地域から約 100 名

発表者：世界 6 の国・地域（マレーシア、台湾、ジョージア、オマーン、インド、日本）の学校

4-2 実施内容

4-2-1 第 1 部：設立 20 周年を祝って

会場に NDYS-OB/OG が 20 周年のお祝いビデオメッセージを寄せてくれた。「ユースがつなぐ『防災の未来』」をめざして、新たな一歩を進んでいく。



図 3. 祝ビデオメッセージ：中野 元太（京都大学防災研究所巨大災害研究センター 准教授 NDYS-OB）

4-2-2 第 2 部：活動発表&ディスカッション

阪神・淡路大震災の経験・教訓を国内外の「次世代」へつなげよう！

4-2-2-1 ◇阪神・淡路大震災から 30 年。高校生からの提言

神戸市立葺合高等学校国際科の生徒 6 名は、阪神・淡路大震災の教訓を活かした防災活動の成果を、国内外に向けて英語による発表をした。

研究経過報告：

2024 年 4 月から、6 名は阪神・淡路大震災の教訓を活かし、自然災害に強い社会を創るためのヤングリーダーやサポーターになるための方法について、データ収集と調査に乗り出した。国際的な防災教育発展の礎となった阪神・淡路大震災で起こった出来事を忘れずに、そこから学んだ教訓を活かし、日本の災害時の状況を改善し、地域防災としての南海トラフ大地震に備えなければならない。



図 4. 神戸市立葺合高等学校国際科 2 年 グローバル・スタディーズ 防災チーム

2024 年 7 月、「阪神・淡路大震災から 30 年を迎えて キックオフ！」として、オンラインで「2024 in KOBE」を開催。世界 8 の国・地域の NDYS スクールの生徒は、パソコンやスマホの画面に向かって、エールを送りあった。



図 5. 「キックオフ！」オンライン写真撮影

2024 年 10 月 13 日、「国際防災デー2024 に寄せて」として、阪神・淡路大震災から 30 年。高校生の提言 ユースがつなぐ「防災の未来」をタイトルとして、#DRRDay のハッシュタグで、国際防災デー2024 に参加した。

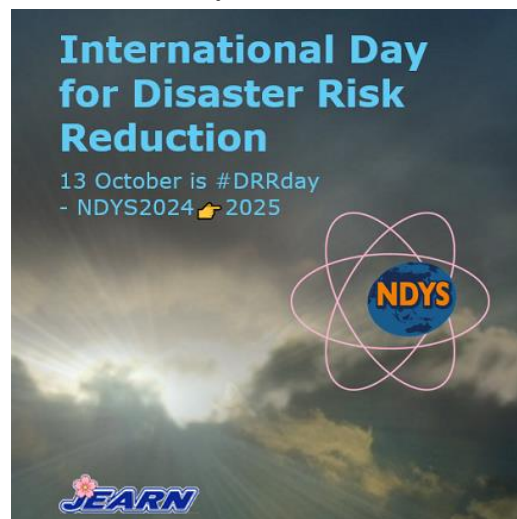


図 6. 国際防災デー2024 に寄せて

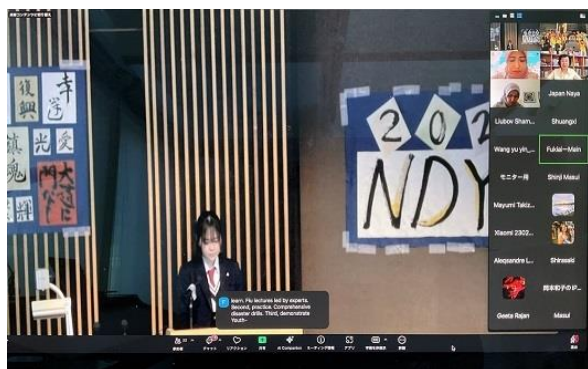


図 7. 神戸市立葺合高等学校の生徒による
英語による国内外へ向けての発表



多くの防災の
専門家の助言
をいただき、
学びを深めて
いった。

2025 年 3 月、阪神・淡路大震災から学んだ教訓を活かし、災害関連死を防ぐための対策や備え、避難所における社会的な不平等の改善、地震発生時の被害軽減に向けた自助と共助の強化をめざしてなどを課題として研究の成果を発表した。そのまとめとして、地域防災を高校生が主体となって運営する活動を「LPD：防災プロジェクト」と名付けて提案した。

4-2-2-2 ◇特別講演：スマトラ地震・インド洋津波から20年

阪神・淡路大震災からの学びを生かした活動報告 インドネシア・アチェの「Build Back Better (より良い復興)」

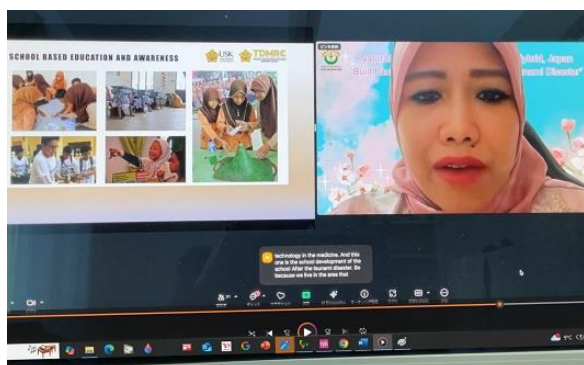


図 8. 講演者：ウイザー・プトゥリ・メララトゥナ

「防災世界子ども会議 2005in ひょうご」国際会議で、バンダ・アチェの高校生としてインド洋津波の報告。マリクサレ大学 NDYS-OG

4-2-2-3 ◇世界のユースとディスカッション

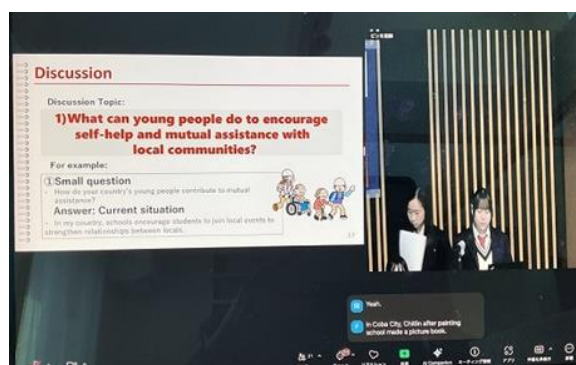


図 9. 英語によるディスカッションの司会

1) 各国で行われている自助・共助の対策

- ・小学生が防災イベントでポスター発表をして、地域の住民に呼びかけている。(台湾)
- ・防災教育をカリキュラムに入れて、必修にすると良い。(オマーン)

- ・阪神・淡路大震災の日生まれた子どものエピソードを、神戸市の絵画教室の生徒たちが絵本にこめて発行することで、多くの人が災害について学び、考えるきっかけになっている(神戸)

2) 国際防災の観点からユースが国を超えてできること

- ・日本の提案・ハッシュタグを通じた情報共有
例 #YouthInAction
他の国のハッシュタグ案 #DisasterFree

- ・マレーシア・オマーンからの提案：オンラインで防災教育の機会をもつ。いち早く災害対策先進国の取り組みを学び、意見交換をすることで、自国の防災活動を改善できるなど。

4-3 震災30年 記念ミニ・大正琴コンサート



図 10. 「こころのケア」として音楽発表
世界7の国・地域のユースによる大正琴コンサート
自然災害から人々がこころの復興を助けるために、音楽は有益な働きをすることができる。

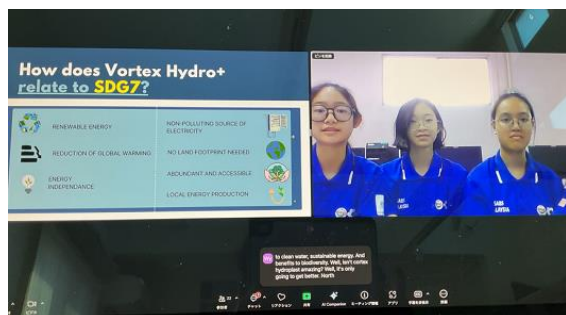
4-4 世界5の国・地域からの活動発表

テーマ： 気候変動に立ち向かう 持続可能な社会の創り手となる

4-4-1 洪水に対する革新的な解決策「The Vortex Hydro プロジェクト」

マレーシア (SMK、スルタン アブ バカル、クアンタン、パハン州)

マレーシアでは、洪水が毎年起きている。洪水による水を飲料に適した水にしたうえ、発電までおこなう The Vortex Hydro+について説明する。



4-4-2 台湾の小学校における防災教育

台湾 (双溪小学校、朴子、嘉義市)

学校での防災訓練の様子など、台湾の小学校で行われている防災教育について具体的に紹介する。



4-4-3 ジョージアでの協働プロジェクト

– NDYS での 15 年

ジョージア (iEARN Georgia、トビリシ)

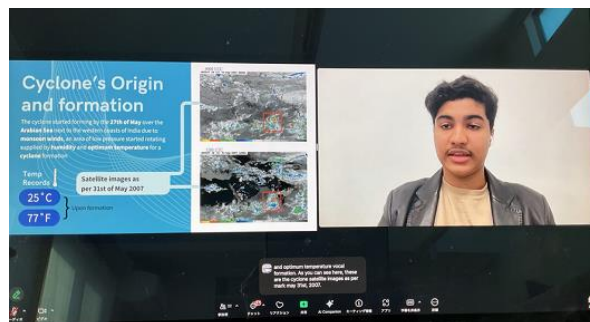
洪水や火山噴火など様々な災害があることを紹介。被害を少なくする方法についても述べる。



4-4-4 サイクロン ゴヌの影響

オマーン (My School、高校、マスカット)

気候変動の影響により、サイクロンの巨大化が起こっており被害も甚大となっている。気候変動に対する、アクションが必要。



4-4-5 インドの自然災害

インド (セント マークス高等学校、ミーラ バグ、ニューデリー)

学校で行っている防災教育の紹介および地域社会に対する防災活動も報告



4-5 NDYS 2025 宣言発表

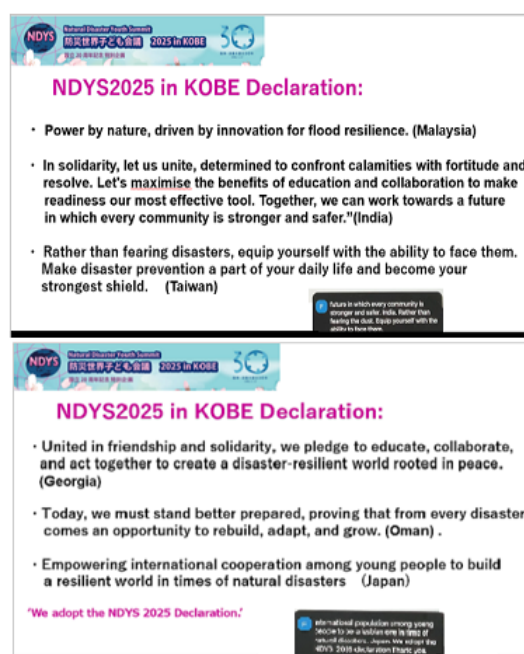


図 11. 各チームからの宣言文の読み上げ

4-6 「しあわせ運べるように」合唱



図 12. マレーシアの生徒の防災活動
プロモーションビデオが流れて

阪神・淡路大震災がきっかけで生まれ、復興を願って歌い継がれてきた「しあわせ運べるように」を、スクリーンを見ながら歌った。

* 閉会後の集合写真（会場+オンライン）



2025. 3. 22 撮影

* 参加証明書の発行

「NDYS 2025 in KOBE」に参加・発表の世界6の国・地域の学校（生徒約100名）へ参加証明書を発行。



* マレーシア

2025. 4. 7 受信

5. 成果と課題

5-1 成果

①世界各国・地域から参加した生徒は、異なる文化のもとで行われる防災活動に目を向け、自国の活動の特徴を理解し、新たな気づきを得た。ま

た、国を超えて協働することで、それぞれの国・地域で活かせるような解決策を見つけることができると、学習に向かう気持ちを高め、主体的な学びにつながった。

②NDYS 設立 20 周年の節目に参加することができ、阪神・淡路大震災の教訓を活かし、今後さらに起こりえる甚大な自然災害の切迫性を感じて、防災の重要性を再認識した。生徒は自助力を身につけ、共助力を高め、地域の人々の命を救う活動に、もっと積極的に取り組む責務を感じた。

③葺合高校の生徒が、英語で発表や意見交換をすることで、国内外に防災の重要性を発信することができた。

④葺合高校の生徒は、1 年間かけて健康・人権・教育の視点から「防災」の問題を探り、各自がテーマを決め課題研究にとりくんだ。「防災世界子ども会議」で発表し、ディスカッションに参加し、その後も各国の生徒に質問を送る関係を築くことで、国際防災の視点からも自分の研究を高めることができ、論理的思考力やコミュニケーション能力の育成につながった。

5-2 課題

①プロジェクト開始から 20 年、英語を国際共通語としての国際協働学習をめざしてきた。今年は念願であった、生徒による司会進行及び海外の生徒とのディスカッションを行うことができた。今後このようなコラボレーション活動を発展させ、プロジェクトを継続できるかが課題である。

②英語力はグローバル社会を生きるわが国の子どもたちの可能性を大きく広げる重要なツールである。英語の授業のカリキュラム改善や生徒が英語力を活かせ、発表や意見交換ができるグローバルな学びの場を充実させていくことが重要である。

③学校の施設設備の使用可能な日程と人的配置の関係で、開催時期が 3 月下旬の土曜日になった。年度替わりの時期であったため、校内での運営関係者と生徒の参加者を多数集めることが出来なかった。

④20 年を経て、この取り組みに参加した生徒たちが、その後、どのように成長したのかについての十分な検証ができていない。今後は、長期的な視点で調査を続けていくことが必要である。

⑤海外の取り組みから学び、互いに協働で国際防災の対策を深める時期にきている。各国・地域の最新の取り組みを学び、正しい情報を共有し、ユースが意見交換できるような、国際防災発展の仕組みづくりを防災の研究者を交えて進めたい。

デジタル時代における大正琴プロジェクト&琴リンピックの国際協働学習

～新たな持続可能な成長を目指す大正琴プロジェクト&琴リンピック～

大正琴プロジェクト代表 廣田 元子
琴リンピック実行委員長 琴源（金子 秀樹）
琴リンピック実行委員 琴源心（今井 真美）
防災世界子ども会議代表 納谷 淑恵

アイアーン大正琴プロジェクトは、外部団体である琴リンピック実行委員会と協働で世界に「大正琴の輪」を広げている。このプロジェクトは、琴リンピック事務局から贈呈された大正琴を、それぞれの学校が、「琴リンピック」出場を目指して練習に取り組み、2年に一度開催される「琴リンピック」の為に来日又は、zoomで参加し、新潟市の大舞台で演奏発表をする取り組みである。来日した生徒・先生達は期間中、日本の文化や共同施設のルールを学んだり、自分達の文化芸能をカルチャーナイトで紹介したりする。「防災世界子ども会議」の宣言発表、防災マップ展示も同時発表をする。

キーワード 大正琴メソッドのデジタル交流 小中高等学校 世界大正琴交流大会 新潟市

1. はじめに

大正琴は大正時代に名古屋の森田吾郎が二弦琴とタイプライターを合体させて作った楽器である。小学校等で使われる鍵盤ハーモニカは大正琴が原型だと知らない人も多い。日本では大正琴ブームは過ぎ去り、現在ではお年寄りの楽器だとしてしか認識されていない。100年以上も販売促進されていても日本の伝統楽器とは認められず「おもちゃ楽器」と下けすまれている。若い時に練習していた楽器を捨てるのは勿体無いと「琴リンピック」事務局に送られて来た大正琴は、大正琴愛好家グループがボランティアで綺麗に掃除をし、調整をして海外の学校に贈呈されている。

2. 目的と方法

2-1 目的

新しい持続可能な成長を目指す大正琴プロジェクトは、古い物をもう一度見直し、世界に再スタートさせることを目的としている。「琴リンピック」事務局の願いと、大正琴プロジェクトの願いが合致したため、2014年からは協働でプロジェクトを推進している。

2-2 方法

1) 実施計画案

元々「防災世界子ども会議」の「心のケア」として生まれたプロジェクトである為、今まで活動を共にして来た NDYS のメンバーに声を掛け「防災世界子ども会議&琴リンピック同時開催」を条件に「世界大正琴交流大会 琴リンピック」を計画した。

2) 内容項目

中古の大正琴を甦らせ世界の学校に贈呈する。琴リンピックに参加した人全員に楽器を持

って帰ってもらう。（人力）演奏方法や楽譜、音源は琴リンピックホームページからダウンロードできるようにする。（楽譜、音源、指導メソッドのデジタル化）

3) 評価方法

練習した演奏は録画して YouTube に Up してもらい、Zoom やホームページで進捗状況をチェックしたり、指導したりする。その結果の成果を2年に一度新潟市の舞台で発表する。

（デジタル&リアル国際協働学習）

3. 活動内容・研究内容

3-1 具体的な実施内容 1

プロジェクト参加グループは、学校単位であったり、複数の学校が協力し合って参加したり、地域の子どもたちが集まってグループを形成して、地域ぐるみで参加するなどさまざまであり、学校の枠を超えたプロジェクトの広がりを見せている。

3-2 具体的な実施内容 2（例マレーシアの学校）

各国に持ち帰った大正琴の楽器を地域に貢献できるようにイベント等には積極的に参加している。（地域社会貢献）



それぞれの国で大正琴が弾ける人材を育成している。（人材育成）



来日して「琴リンピック」に参加できるように3校合同の大正琴部活動を結成し、練習をしたり、ASEAN 主催のコンサートに参加したりしている。(チャレンジ精神)



マレーシアでは生徒達の部活動に触発され、一般の人の部活動も発足した。



3-3 具体的な実施内容

2016年に第1回が開催された。その後、2018年とコロナ禍で中止になった2020年以外は2年ごとに開催された。2024年8月19日(日)は「第4回 世界大正琴交流大会 琴リンピック2024イン新潟」が開催され、参加国の内訳は、ゆいポート103名+新潟の留学生45名日本人205名の9ヵ国353人の参加があった。iEARN アゼルバイジャン、インド、インドネシア、ネパール、マレーシア、ジョージア、日本。シンガポール(愛宕商事)、モンゴル(新潟県モンゴル交流協会)。

4. 成果と課題

○成果

前回出演した生徒や先生が今回も生徒の人数を増やして「琴リンピック」に参加した。琴リンピック本番前にはNDYSメンバー全員が舞台に立ち2024年の宣言発表をした。

「第4回世界大正琴交流大会 琴リンピック2024イン新潟」



○課題

「第4回 世界大正琴交流大会 琴リンピック2024イン新潟」が開催の各国代表とのミーティングで次のような要望があった。

Q: 公的施設を使用する場合のルールがとても厳しくせつかく日本に来たのに施設からの苦情を聞くことが多かったので施設を変更してほしい。

A: 次回は日本文化も含めて公共施設のルール体験も異文化学習の一環として理解してもらい、期間中楽しく生活ができるようにしたい。各国は琴リンピック合宿期間中は、全員で施設利用のためのリーダーと係分担を決め、毎日リーダー会を開き改善を図る。

Q: zoomを使ってリアルタイムで大正琴の指導をしてほしい。

A: 月に1度日時を決め、メイン画面に集まり、その後、zoomのルームを上、中、初級、防災「心のケア」について話し合うクラスに分かれる。それぞれの講師と大正琴メソッドに沿って練習したり、意見交換しあったりすることができるよう工夫する。各クラスで上達したら認定書が授与される。上級までのレベルに達した人は指導者の認定試験が受けられ、認定されれば、地域で指導者になれる。参考 <https://kotolympic.com/>

The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project

～コロナ禍後初の五輪・パラリンピック、パリ 2024～

文京学院大学 滝沢麻由美

要旨 2019年のプロジェクト発足後、東京 2020、北京 2022 を経て、コロナ禍後初の開催であるパリ 2024 に向けておこなった 3 回目のプロジェクト活動について報告する。特に毎回恒例のオンライン発表交流会(TGE)でも「オリンピック・パラリンピックの価値」と「オリンピック休戦」を中心におこない、非同期・同期型ともに重点を置くことができた。

キーワード: 五輪・パラリンピック教育 パリ 2024 オリンピック休戦 オンライン発表会

1. はじめに

このプロジェクトは、東京 2020 へ向けて 2016 年から始まった東京都教委のオリンピック・パラリンピック教育について筆者が知ったことがきっかけで 2019 年にスタートした。そして、コロナ禍での延期と開催を経て北京 2022 へと続き、その 2 年 5 カ月後、コロナ終息後初めての大会であるパリ 2024 を迎えた。本報告では、昨年度のレポート以降の大会前、及び期間中の約半年の活動を中心に述べる。

北京 2022 パラリンピック直前に起きたウクライナ侵攻は、古代オリンピックの起源から現代に引き継がれている「オリンピック休戦(Olympic Truce)」の理念に反し、さらに他での戦火も続く中でのパリ 2024 は、筆者がボランティアとして参加したコロナ禍の東京 2020 とはまた違った大きな緊張感があった。そんな中、今回は訪問者として、ギリシャでは古代からの歴史の長さを、パリでは万国旗の下につどった各国選手たちの渾身の競技と人々の笑顔や歓声に直に触れ、五輪・パラの存在意義は、それらを可能にするための国際的な連携・協働にあると実感した。古代から受け継がれた普遍的な理念を学びつつ、賛否両論ある現代的な課題には批判的思考で向き合いながら、何らかの行動を起こしていく well-being & peace project を目指して、今後も各国の教師や生徒たちと協働していく意味をあらためて見出す機会となった。

2. 目的と方法

2-1 目的

TOPA が目標とする SDGs は次の 3 つである。
No. 3 「すべての人に健康と福祉を」
No.10 「人や国の不平等をなくそう」
No.17 「パートナーシップで目標を達成しよう」
これに沿って TOPA では、オリンピック・パラ

リンピックの理念、特に「オリンピック・パラリンピックの価値(Olympic & Paralympic Values)」」「フェアプレー」「オリンピック休戦」について学ぶことを通して、友情、励ましの精神、多様性の中での solidarity(団結)と well-being(ウェルビーイング)を育む。

2-2 方法

1) 実施計画案

対象: K~12 (年長~高 3)

プロジェクトの活動時間: 授業 3 コマ以上

・自己紹介、各校でのスポーツの取り組み、自国の五輪・パラニュースなどの投稿。

・オリンピック・パラリンピックの価値を学び自分の好きな価値のこばを体现していると思う自国の代表選手をその理由とともに選びコラージュやスライド等の成果物にする。

・TOPA Global Exhibition (TGE) 2024 (Zoom)
(2024 年 6 月 29 日 20:00-21:30 日本時間)

毎回恒例の大会開催前の教師と中高生、JEARN Youth 参加のオンライン交流発表会(TGE2024)

2) 内容の特徴

前述のように、特に近年「オリンピック休戦」について共に考える必要性を切実に感じているため、TGE 2024 でも各校の発表以外に、これをテーマとした全体ワークショップもおこない、ピースメッセージについて意見を交わし協働成果物 (peace message poster)を作成した。

3) 評価方法

TGE 2024 全体を「内容言語統合型学習 (CLIL)」として、その 4 Cs (Content, Communication, Cognition, Community / Culture) のフレームワークを用いて、その日の活動案を作成した。そしてその 4 Cs 観点にもとづいた reflection form (4 件法と自由記述)を作成し、Zoom 終了後に参加教師と生徒全員に記入してもらった。この結果と考察の詳細は、別

の機会の後日発表する予定である。

3. 活動内容・研究内容

3-1 コラボレーションセンター (Schoolology) で
参加国：小学校 4 校（日本 2 校、豪州、ポルトガル）、中高 4 校（ベラルーシ、ネパール、ブラジル、日本）、JEARN Youth（東洋学園大学、坂本ひとみ先生）

活動内容：自己紹介後、ポルトガルとネパール（滝沢, 2024）、日本の小学校からオリンピック休戦とピース折り鶴ポスターを作成（写真 1, 2）



写真 1 ピース折り鶴とオリンピック休戦



写真 2 パリ 2024 へのピースポスター

ベラルーシからは自国のオリンピック・ミュージアム訪問レポート、豪州と日本からの 3 校から My Happy Face & Word 作品、そのうちの日豪 2 校間では「オリ・パラの価値」のことばと自国の代表選手のカラーズ作品を発表しあうオンライン交流会も開催前におこなった。

3-2 TOPA Global Exhibition (TGE) 2024

日時：2024 年 6 月 29 日(土) 20:00-21:30

参加国：ブラジル、ベラルーシ、ネパール、豪州、日本（JEARN Youth: 発表&MC）約 30 名

<当日プログラム>

- 1) Opening ~ Hello from around the World
- 2) Paris 2024 Overview
- 3) Youth session ~ My favorite athletes and Olympic & Paralympic Values
- 4) Workshop ~ Olympic Truce & Peace Discussion on peace messages (写真 3)
- 5) Closing ~ Let's celebrate "Unity in Diversity" at Paris 2024! (写真 4)



写真 3 Olympic Truce & Peace poster



写真 4 TGE 2024 にて各国の参加者たち

4. 成果と課題

○成果

・どの年齢レベルの学校も、それぞれの活動トピックについての学びをよく表現した発表や成果物が見られた。

・2023 年度から引き続き Olympic Truce について、さまざまな学校と一緒に学ぶことができた。また、エラスムス+で知り合ったギリシャの先生から関連内容のビデオ提供を受けることができた。今後もこのテーマをずっと続けていくことが必須であると考えている。

・東京 2020 に引き続き、しかし今回はノーマルな大会、パリ 2024 の期間中に、実際筆者が現地に赴いたことで、ファシリテーターとしてプロジェクトの目的についてより体験的に深く理解したり、問題意識を持てるようになった。

○課題

・開催国のカントリー・コーディネーターや地元校との連携などが今回はあまりうまくいかなかったため、今後はまた良くしていきたい。

・コロナ禍後の今回から夏季五輪前はほとんどの国の学校が長期休み中になったため、TGE の参加が大変難しくなった。次回の夏季は LA 2028 なので、やはり時期を検討する必要がある。

5. 参考文献

滝沢麻由美 (2024) 「The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project -パリ 2024 に向けて教師協働への取り組み-」『国際協働学習 iEARN レポート (2023)』 <https://jeearn.jp/iearn-report/>

Machinto – Hiroshima/Nagasaki for Peace

～今、この時代に広島・長崎が語り継ぐことは何か～

Project Facilitator 勝又恵理子・岡田麻唯

本プロジェクトは、SDGsに関連する「16 平和と公正をすべての人に」、「17 パートナリーシップで目標を達成しよう」をテーマに、戦争と平和について学ぶプロジェクトである。地球を破滅へ導く核兵器の脅威を伝えられる広島・長崎の辛い経験をもとに、地球上で繰り返される内戦・紛争・戦争について共に学び、平和の大切さを伝える活動を実施している。

キーワード 核兵器 戦争 平和 ワークショップ

1. はじめに

初代理事長でもあり、現在は会員として活動している高井洋子氏によって、2006 年から iEARN プロジェクトとして誕生した本プロジェクトは 17 年目を迎えた。2024 年度は多くの国や学校からの参加はなかったものの、取り組んだクラスの内容は深く、豊かであった。参加国は台湾と日本の 2 か国であった。

高森高校（山口県）赤松先生の指導で 27 件の平和のための物語の Slide Show が投稿された。お互いに否みあう者同士がどのように和合し合うことが可能か等、素晴らしい作品集である。iEARN のサイトにアップされているので参照されたい。

以下 上記のスライドを掲載する。

2. 目的と方法

2-1 目的

広島・長崎を知り、現状を知り、世界平和への歩みをフォーラムやオンライン会議で共有する本プロジェクトを通して、生徒同士が学び合い、地球市民としてコミュニケーションを深め、互いに平和への道を歩むことを目的とする。

• Then, the owl said,
"Peace is in everyone's heart.
Peace is in everyone's heart. It can always be cultivated by understanding and respecting each other."



2-2 方法

1) Schoology を使った iEARN Collaboration Center で Machinto Hiroshima/Nagasaki for Peace プロジェクトに登録する。

2) Teacher's Guide を読み、"Machinto books for your class" で「まちゃんと」「My Hiroshima」の 2 冊の絵本を申し込む。

3) Machinto Student Works Part 1～3 の流れに沿って進める。

Part 1: 広島・長崎で知っていることを書く

Part 2: 2 冊の本を読み、コメントする

Part 3: 平和への個々の作品を共有する

4) 各種 Machinto プログラムの提案・参加
・ What is HEIWA? ワークショップ (Youth Project)

5) Zoom で Machinto 会議を行う。

I believe it isn't justice to take revenge to people who cause harm to me and it is justice to be kind to them.



We have to know that all cultures are different and acknowledge the differences. If all people acknowledged them, many lives would be saved. Yuka said to herself.



It is good to have many cultures in the world.



図 1 物語のスライド

3. 活動内容・研究内容

3-1 Machinto Student Work III

表 1 高森高校生の作成した作品名

作品名	作品
Peace in Butter and Margarine	Yuna
Fish in Rain	Yorie
The Importance of Acknowledging Differences	Sakura
The Day the Twins Learned	Nonoka
Create a Peace	Mahiro
Towards Peace	Fuyuko
Hansel and Gretel	Kurumi
Brave Princess	Chihaki
We Complement Each Other and Live Together	Mina
Snow White	Sumire
Meaning of Life	Aoi
Little Red Riding Hood in Peace	Ai
Grow Vegetables	Aya
Peace Closed by Nuclear Weapons	Taiki
Two Horses	Yui
Peace with Her Power	Kika
The World's Most Peaceful Parent-Child Fight	Anna
The Fight of Toys	Airi
Dog and Cat Wars	Kotarou
Prisoners	Noriyuki
Sylvanian Village Fruit Fight	Nozomi
The Importance of Friends	Miu
Grandpa Blooming Peace	Luka
What is Happiness?	Trinity
A Balloon Flying in the Sky	Kairi
War and Peace	Kanase
Seeds of Peace in a Small Village	Ryuki

3-2 "What is HEIWA?" Workshop

青山学院大学の Youth Project である、What is HEIWA? の2日間のワークショップが2024年6月7日と21日に実施された。参加者は、台湾の Jhengsing Junior High School の陳貞君(Margaret Chen)先生の生徒15名。

ワークショップの概要は、参加者はワークショップ前に、まちんとの本を読み、広島と長崎の原爆に関するビデオ視聴した。1回目のワークショップでは、アイスブレイキングクイズやお互いの文化紹介で交流を深めた。2回目は、絵本『まちんと』や広島

のクイズや、平和について考えるアクティビティを行い、協働学習を深めた。ワークショップ後は、まちんととの絵本とワークショップの内容をもとに、平和についてポスターの絵とその説明文を作成し、大学生ユース・ファシリテーターがポスターへコメントし、非同期型交流が行われた。

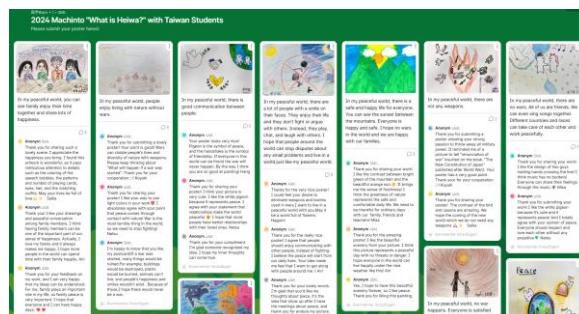


図 2 Padlet を活用したポスターとコメント共有

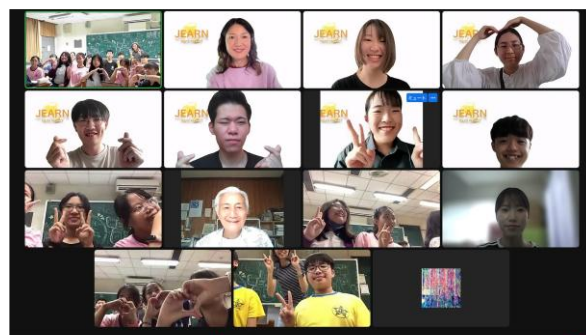


図 3 台湾の中学生とのワークショップの様子

4. 成果と課題

○成果

生徒の皆さんの平和への作品は、内容が豊かで深みがある。特に高森高校の平和の物語の Slide Show はどの作品もクリエイティブで、スライドも素晴らしく、非常に感動的であった。また、台湾の中学生のポスターの絵は平和な暮らしを身近な視点でとらえており、戦争がいかに平和な毎日を脅かすかが描かれていた。

○課題

昨年と同様に海外参加校が少なく、生徒同士のコミュニケーションが期待できなかったため、今後の課題として、国内外の生徒どうしが交流できるようにワークショップの参加校を増やしていきたい。また、より多くの国々からの参加を促進し、多様な視点からの平和への理解を深めることが求められる。

GOMI on EARTH Project

～ゴミの長い旅～

Project Facilitator 岡田麻唯・勝又恵理子

2015年よりスタートした「私はゴミである」という設定で行うプロジェクト。地球温暖化、海洋プラスチックゴミ問題、SDGsにかかわる“6 安全な水とトイレを世界中に”、“11 住み続けられるまちづくりを”、“14 海の豊かさを守ろう”をテーマに身近なゴミへの意識に目覚め、未来の地球を護るためにごみ活動へと展開する。

キーワード ゴミ問題 GOMI 探検家 世界のゴミの現実 活動家

1. はじめに

本プロジェクトは、2015年に初代 JEARN 理事長・現会員の高木洋子氏によって発足された。ゴミ問題は、地球の大きな課題として世界中で注目をされ続け、私たち一人一人が自分の住む地域だけでなく、世界のゴミの現実に関心を持ち、解決に向けて取り組む必要がある。

2. 目的と方法

2-1 目的

目的は、以下の3つである。

1. 普段の生活からゴミへの意識を育てる
2. 自分の地域や国のことだけでなく、地球規模のゴミ問題へと興味・関心を広げ、自ら調査を行い学ぶ力を身につける
3. 参加国間のゴミの現状を共有し、ゴミ問題に取り組む活動家として積極的に行動を起こす

2-2 方法

Schoolology を使った iEARN Collaboration Center “GOMI on EARTH”への参加登録をし、以下の流れに沿って進める。

- 1) 学校紹介・参加者自己紹介
- 2) Part1: GOMI 探検家
- 3) Part2: 世界の GOMI の現実を知る
- 4) Part3: GOMI 活動家
MOTTAINAI シリーズ (Youth Project)
- 5) Reflections

3. 活動内容・研究内容

3-1 学校紹介・参加者自己紹介

2024年度に参加した学校を一部紹介する。

台湾から、The Experimental Primary School of National Dong Hwa University の6年生、モルドバから、Gheorghe Asachi High School の5年生、Mesterul Manole High School の6年生、The Theoretical Lyceum Molesti, Ialoveni の中

学1年生、Academia Picilor Kindergarten の2～7歳と Miron Costin "Floresti" の10～18歳、アメリカから、Aveson International Sports Academy の7年生～12年生と Daycroft School の5年生と6年生、パキスタンから Aga Khan Higher Secondary School、インドから、Kaisiadorys district, Ziezmari gymnasium の8年生～12年生であった。

3-2 MOTTAINAI シリーズ (Youth Project)

JEARN Youth Project に参加する青山学院大学の大学生ファシリテーターが、GOMI on EARTH に参加する生徒たちに向けてゴミについて学びを深められるよう、補助教材としてリサイクルに関する動画やスライドクイズなどを作成した。



図1 右は動画・左はスライドの一部

4. 成果と課題

昨年の課題として挙げられていた参加国や参加クラスが少ないことについては、新しい参加国と学校が増え、幼児～大学生に至るまで幅広い学年に興味関心を持ってもらえたことが良かった。初めての試みとして学年が近い学校同士をマッチングし、Collaboration Center に交流用のフォルダを作成した。

しかし、課題として初めての先生が多く、投稿の時差などの影響もあり、自己紹介だけに留まってしまった。今後は、大学生ファシリテーターが作成した補助教材を使用してもらうなどして国際協働学習を通じた交流が活発に進むようサポートを行う必要がある。

小学校実践編

豪州日本語クラスとの The Teddy Bear Project

～交流校の訪日学校訪問までの1年～

文京学院大学 滝沢麻由美 ・ 大田区立馬込小学校 豊島英明

要旨 本報告は、約1年のオンライン交流の最後に豪州の相手校グループの訪日学校訪問による対面交流をおこなったプロジェクトについてである。活動案は共通のテーマと互いの母語と学習言語の2カ国語を使った構成に工夫しながら「内容言語統合型学習（CLIL）」を用いた。オンラインの非同期型、同期型（Google Meet）を経て、最後に対面が実現したことで、児童の相手意識の高まりやコミュニケーションについての気づきが一層見られることになった。

キーワード 日豪交流 2カ国語 CLIL 英語クラブ 学校訪問 相手意識

1. はじめに

本実践校は長年「学校支援地域本部」が数々の活動をおこなってきているが、筆者滝沢も地域人材として10年以上講師として携わり、特にアイアーンを通して海外の学校との交流に力を入れてきた。その中でテディベア・プロジェクトは、以前も豪州の小学校日本語クラスとおこなったことがある（滝沢, 2018）。今回の交流校は、2023年に滝沢が個人的に日本語クラスで訪問授業をしたことがきっかけで、2025年3月の訪日学校訪問の希望があり、学校として受け入れることになった。この「対面での交流」がゴールにあることが、今回の最大の特色となった。

また、学校長の提案で、訪問までの約1年のオンライン交流は、正課の英語クラブの高学年児童を中心により柔軟におこなっていくことになり、都教委の豪州研修に参加した筆者豊島がクラブ担当、さらに外国語専科教員、ALT、そしてコーディネーター役の滝沢を含む4人の協力体制のもと、毎回のクラブでの活動が進められた。この報告では、その概要を紹介し、特に成果と課題については豊島の見地から述べる。

2. 目的と方法

2-1 目的

1) 前回の実践同様、学習指導要領の3観点（知識・技能、思判表、主体的な態度）とCLILの授業案作成項目4Csの観点（Content 内容、Communication 言語、Cognition 思考、Community /Culture 協同/文化理解）を組み合わせ、この交流の特徴である2カ国語でのやり取りを含んだ多様な活動案を作成・実施する。
2) この活動を通して、日本の児童が同年代の外国の児童への相手意識を高めること。特に、オンライン非同期型交流から同期型（Google

Meet）を経て、最後に「対面」交流へと向かった児童の相手意識の変化とその特徴を考察する。

2-2 方法

1) 実施計画案

交流期間：2024年4月～2025年3月

対象と活動時間：

日本～英語クラブ（年10回、1回約60分）

豪州～日本語クラス（週1回50分、随時）

2) 活動での工夫点

- ・ほぼ毎月共通のトピックについて、それぞれの様子を写真やビデオ等で送り合った。可能な限り2カ国語でのCLILワークシートを作成し、共同で使用するようにした。

- ・日本では、各児童のChromebookを活用し、クラブのGoogleクラスルームを作り、豪州から送られた自己紹介カードの翻訳（Google Lens）内容や、自分の発表内容、豪州のぬいぐるみ留学生のホームステイの様子などを投稿し合った。

- ・訪日学校訪問の際に、より相手意識が高まるよう日豪生徒間でバディ（ペア）を決めた。

3) 評価方法

① 前述の学習指導要領3観点×CLILの4Cs観点による児童の振り返り（4件法と自由記述）

- ・各活動（抜粋）について
- ・「コリジンスクールの馬込小訪問」（当日について）
- ・「馬込＆コリジン日豪交流プロジェクト」（全体について）

② 「異文化遭遇経験についての振り返り」（阿部・中村, 2021; 松本他, 2021-2023）

- ・Autobiography of Intercultural Encounter for Young Learners on Corrigin & Magome Exchange Project

以上①②の分析・考察結果の詳細は、後日別の機会で発表する予定。

3. 活動内容・研究内容

3-1 活動実施内容

- 4 月 ・ 自己紹介ビデオ&絵カード作成
- 5 月 ・ 相手校の自己紹介ビデオ視聴
 - ・ 自分たちのぬいぐるみ留学生の自己紹介文とビデオ作成 & 送り出し
- 6 月 ・ 相手校からの郵便物到着&ぬいぐるみ留学生の自己紹介ビデオ視聴
 - ・ パリ 2026 について、TOPA プロジェクト参加。サダコの祈りの折り鶴とオリンピック休戦を学び、ピースポスター作成
- 8 月 ・ 夏休みの活動でも TOPA 参加。日豪互いのパリ 2026 代表選手と「オリンピック・パラリンピックの価値」について、豪州と Google Meet 発表交流会実施
- 9 月 ・ 相手校の自己紹介カードの翻訳内容を英語クラブの Google クラスルームに投稿
- 10 月 ・ 豪州での留学生のホームステイの様子の投稿を見る。「こちらではどのような気持ちで、どんなことを経験させたいか」について話し合った後、順番にホームステイをさせた際の様子を各自 Google クラスルームに投稿&コメント共有
- 11 月 ・ 翌月の豪州との Google Meet 交流会に向けて「私の好きなおすすめの日本の食べ物」について発表内容作成（写真とスピーチ）Google クラスルームに投稿
- 12 月 ・ 上記について Google Meet 交流会実施
- 1 月 （クラブ紹介の準備と当日で 2 回分）
- 2 月 ・ 訪日学校訪問のための準備（自分のパディのための名札や歓迎のレイ作り等）
- 3 月 ・ 学校訪問当日（豪州:大人 5 名、生徒 12 名）
 高学年外国語クラス（写真 1）を中心に全校で交流：集会、豪州の学校紹介、2カ国語自己紹介、英語のゲームや歌、日本の昔遊び、校内ツアー、音楽・図工・理科・国語授業見学、英語クラブとお弁当タイム（写真 2）、伝言ゲーム、日英絵本タイム、色鬼ごっこ、お別れ会等



写真 1 外国語授業での交流

4. 成果と課題

○成果（児童、担当教員、学校）

・実際に留学生（ぬいぐるみ）、カード、イラスト、文具等の交換をすることで、互いの生活や文化に触れ、海外への関心や視野を広げることができた。また贈られた物に触れることで、視覚や聴覚を通し、日本との違いや共通点に気づき、実感を伴った異文化交流ができた。パディを組むことで、児童のコミュニケーション力や実践的な表現力をより育成することができた。



写真 2 パディと一緒に弁当タイム

・自己紹介カードやTV会議等、実際に相手に伝えるという活動を通して、伝えるためにはまずは自分達が知る必要があると必要感のある自文化理解につながられた。その中で、日本や日本人としての良さ自分達が住む地域の良さを確認したり、実感したりすることができた。また担当教員としてプロジェクトに関わることで、自身の国際理解教育のスキルや ICT 活用能力、柔軟な指導力を高めることができた。

・学校として、東京都が目指すグローバル教育や異文化理解教育の推進に寄与することができた。英語クラブには、様々な学年が在籍していた為、他クラスの教員や学校全体の国際交流への関心を高めることができた。

○課題（児童、担当教員、学校）

・子供達は決められた話題だけでなく、自由な話題について話ができる実践力をもう少し高めていきたい。

・活動時間の制約や教員間の連携、交流のスケジュールをきちんと決めることに課題がある。

・年度や担当教員が変わることで、プロジェクトの継続が断たれてしまうことがある。活動記録やマニュアルの共有が十分でないと翌年以降への引継ぎが難しいかも知れない。

以上、今後の改善に向けて検討していきたい。

5. 参考文献

阿部始子・中村香(2021)「小学生は異文化体験から何を学んだか」第21回小学校英語教育学会（JES）関東・埼玉大会 口頭発表資料(2021年10月10日)

滝沢麻由美(2018)「2カ国語で Teddy Bear Project」『国際協働学習 IEARN レポート(2018)』

<https://iearn.jp/iearn-report/>

松本佳穂子他(2021-2023)「AIE とは」『異文化間能力を伸ばす新しい異文化理解教育』

<https://intercultural-education.net/aie/>

Global Learning Circles: Hello World の実践

～非同期型交流で国際協働学習の入り口に立つ～

世田谷区立千歳小学校・外国語科支援員 長谷川早百合

都内公立小学校が地域と学校の協働による放課後活動として Global Learning Circles: Hello World プロジェクトに参加した。集まった多学年の児童たちは5段階に分かれた非同期型交流プロジェクトを体験した。6週間の経験を経て英語力を発揮し世界・異文化への興味や理解を深めることができた。地域と学校の連携・協働から可能となる新たな形の国際理解教育の貴重なヒントを得ることができた。

地域と学校 非同期型交流 小学校 放課後 国際理解教育

1. はじめに

筆者が支援する公立小学校は、2019年度から毎年 Teddy Bear Project, Holiday Card Exchange (HCE), The Olympics and Paralympics in Action (TOPA)のいずれかのプロジェクトを通じて海外校と国際交流を進めてきた。5, 6年生の外国語科授業に組み込まれているプロジェクトや、4～6年生を対象に「有志」で参加するプロジェクトもあり、学校は柔軟な対応をしながら児童と世界をつなげてきた。

その背景には、本校が1984年度に海外帰国子女教育センター校となり適応教室を開設した（現在は「帰国・外国人児童適応支援教室」）という地域と学校の一つの特性がある。「国際理解教育」を推進する本校の学校運営委員会も、子どもたちが国際交流プロジェクトに参加できるよう学校を支えてきた。本稿は、学校運営委員会の発案で実現した地域と学校の協働による放課後活動として参加した Global Learning Circles: Hello World の実践報告である。

2. 目的と方法

Global Learning Circles (iEARN, pp.11-16)はファシリテーターのもとで体系的なプロセスを踏む「極めて対話的」なiEARNの国際協働学習である。対象学年、期間、テーマを選ぶことができ、世界の6～8校(4～7国)で「学びのサークル」が作られ、テーマに沿った課題の考察を経て最終成果物を共有する。その中でもHello Worldは「ビギナー用5週間プロジェクト」で、過去にiEARNプロジェクトやオンライン協働学習に参加したことがない小中高生の先生や生徒が対象だ。交流はiEARN Collaboration Centerで行われ、ビデオレター、スライド、写真などを使用する非同期型交流となる。交流言語は英語だ。活動内容は、①先生同士の自己紹介、②生徒たちの自己紹介、③質問の交換、④答えの

交換、⑤振り返りと終わりの挨拶と、5段階を参加校が一斉に行う国際協働学習の重要な導入ステージが体験できる。

2-1 目的

今回の実践には二つの目的があった。

- 1) 世界の人たちとの交流を通して子供たちの異文化間コミュニケーション能力を育む
- 2) 児童の国際理解教育を支える地域と学校の連携・協働の可能性を探る

2-2 方法

1) 実施計画案

活動名: Chitose Hello World! Project

開催期間: 2025年1月30日～3月6日(全6回)

開催時間: 毎週木曜日放課後(15:30～16:30)

参加条件: 「世界と繋がりたい意欲(英語力問わず)」、3回以上参加、事前申込み

参加児童: 小1, 3, 4, 6年生(計7名)

指導者: 2名(著者と5年生外国語科支援員)

2) 内容項目

プロジェクトは「トライアル」と位置づけ、帰国・外国籍児童のご家庭による委員会を通じて児童を募集した。結果、海外校から転校してきた日英話者6名と英語初心者の日中話者1名が集まった。児童のプライバシーに考慮し名前は出さず、顔の公開は参加児童の保護者と事前に確認をした。

3) 評価方法

以下をもとに成果と課題を検証した。

- ・児童への事後アンケートと振り返りシート
- ・参観教員の事後アンケート
- ・指導者二人の観察と振り返り

3. 活動内容

Hello Worldプロジェクト(以下、HW)では参加校同士が各段階の活動を合わせるために、ファシリテーターからその週の目標や期限などの指示が与えられた。各段階の投稿例も多く紹

介された。交流校はスタート直前に先生の名前と国名が分かり iEARN Collaboration Center で互いの自己紹介やその後の投稿で親交を深めた。

今回の HW に参加した学校は当初モルドバ 3 校、インド 2 校、アメリカ 1 校と日本の計 7 校だったが、最後まで交流できたのは、モルドバ 1 校（4 年生・英語科）、インド 1 校（5 年生・英語科）、アメリカ 1 校（4 年生・国語科）と我々の計 4 校だった。

放課後クラスでは毎回活動目標を明確にし、児童が主体的に考えて対話を通じて交流メッセージを協働的に作れるよう試みた。クラス内のコミュニケーションは、英語を積極的に使える雰囲気を作りつつ、活動内容と児童の英語力に応じて英語と日本語を使い分けた。交流用資料（動画やスライド）は全て指導者たちが作成し iEARN Collaboration Center に投稿した。

以下、各回で行った活動内容をまとめた。

3-1 第 1 回 顔合わせとプロジェクト紹介

放課後クラスで小 1 から小 6 と学年をまたぐため、児童同士の自己紹介を最初の英語活動とした。興味のある国を考え、それを共有し、最後に HW プロジェクトの紹介を行った。

3-2 第 2 回 相手校への自己紹介を作る

先生同士の自己紹介（HW 第一段階）から得た相手校の HP や先生の情報を児童に紹介し、相手校への自己紹介を各自考え、英語で書き、英語で言う練習をして録画をした。

3-3 第 3 回 相手校への質問を作る①

相手校へ送る自己紹介録画を全員で確認した。相手校に訊ねたいことを考え、英語で質問リストを作成した。活動後、自己紹介を編集し、iEARN Collaboration Center に投稿した。

3-4 第 4 回 自己紹介視聴と質問を作る②

相手校の自己紹介を視聴した。前回作成した相手校への質問リストから質問を絞り、英語の訊ね方を練習し、演出を考えて録画した。動画編集をして、質問を投稿した。

3-5 第 5 回 相手校の質問に答える

相手校からの質問がビデオや文字で届いた。高学年と低中学年の二手に分かれて回答作業を行った。児童が希望するデザインのスライドに答えを打ち込み、答えを投稿した。

3-6 第 6 回 振り返りと最後の挨拶をまとめる

日本からの質問に相手校は動画（図 1）や音声で回答してくれた。楽しかったことや気づいた違い等を振り返り、英語でまとめ、児童の提案でインタビュー形式の振り返り動画を撮った。編集したものを投稿し、HW の全活動を終了した。

3-7 特別回（追加） 証書の配布など

プロジェクト終了後に発行される HW 参加証書を児童に渡し、後から届いた他校の「振り返りと最後の挨拶」の動画を鑑賞した。



図 1 モルドバの答えに集中する児童と先生

4. 成果と課題

4-1 成果

児童は、段階的活動内容の「自己紹介、質問と答え、振り返りと最後の挨拶」を通じて、日本を知らない相手へ英語で伝えるために思考と表現を繰り返した。それぞれの英語力を発揮し、他国の児童の学校生活、習慣や文化を学び、お互いの個人的興味も知り合えた。日本の学校の特徴を海外からの視点に立って紹介することもできた。その過程で異文化への興味と理解は深まったといえよう。非同期型交流に使われたビデオ映像を含むマルチモーダルな対話手法がもたらす相互文化的学びへの可能性を感じた。

また、児童間の助け合いにより児童の発達段階と英語力の差が補われ、主体性をもった児童の協働力、創造力と実行力が観察された。さらに、日英話者にとって自分を表現できる安心感や喜びを得ることができた活動の場だったことも児童と参観教員のアンケートから読み取れた。

国際交流の意義が確認され、地域と学校の連携・協働で可能となる本校にとって新たな形の国際理解教育への貴重なヒントが得られた。

4-2 課題

週 1 回 60 分という時間的制約の中で各回の活動を終えることは容易ではなかった。非同期型交流は時差を気にせず交流用ツールも今は色々選べるが、今回特に動画編集作業が指導者たちの負担となり、技術的スキルや事前の工夫が問われる。また、相手校に参加度や活動タイミングの遅れのリスクがあることは念頭に入れておく必要がある。多学年の児童への対応と英語力の差をどう補うかも今後の課題だ。

今後こうした活動を広げていくためには、学校、保護者、地域の連携・協働体制をどう整えていけるかが鍵となる。

参考文献

iEARN.(2024). iEARN Project Book 2024-2025. https://iearn.org/assets/resources/iEARN-Project-Book-2024-25_Final.pdf

高校実践編



探求学習・“Girl Rising Project”の実践

— 「女性の人権」と「質の高い教育」を目指して—

啓明学園中学校高等学校 関根 真理

持続可能な開発目標（SDGs）には、「目標4：質の高い教育」と「目標5：ジェンダー平等」が含まれている。世界のすべての女子が質の高い教育を受けられるようになれば、彼女たちの周りに良い変化が生まれ、それが社会を変えていく原動力に繋がっていく。Girl Rising のドキュメンタリー動画を通して、開発途上国で現在も続く課題を知り、その解決策を他国の生徒と一緒に考え、共に行動できる力を育むことを目指している。

質の高い教育 女性の人権 国際協同学習 課題発見 課題解決

1. はじめに

Girl Rising プロジェクトを 2013 年に開始した理由は、筆者がマララ・ユスフザイさんの勇気ある行動に共感し、新しいプロジェクトとして女子教育の大切さについて協働学習をしたいと iEARN の Teachers Forum に投稿したのが始まりである。

2. 目的と方法

Girl Rising プロジェクトは、開発途上国で女子がどのような境遇にあり、その中で教育を受けた女子がどのように変化し、周りに影響を与えることが出来るかを学ぶ。さらに、他国の生徒と協働学習することにより、自国や他国に存在するジェンダー問題を発見し、課題を解決するために立ち上がり、アクションを起こすことを目的としている。

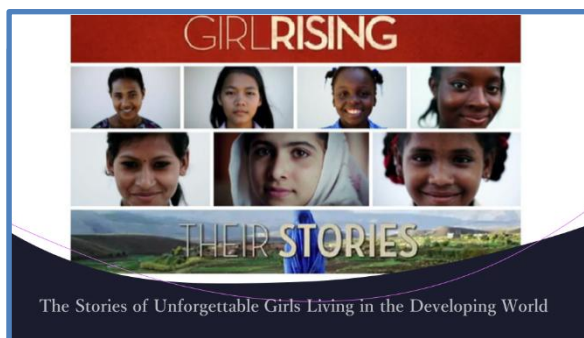
参加するには、まず Youtube 動画で公開されている Girl Rising の 9 ヶ国（カンボジア、ハイチ、ネパール、エジプト、エチオピア、インド、ペルー、シエラレオネ、アフガニスタン）および Brave Girl（ケニア難民キャンプ）の少女たちの

教材映像を視聴することが可能である。どの国の映像をどのぐらいの期間費やして学習するかは、担当教員の判断による。国によって児童労働・児童婚・貧困難民など、テーマと内容と問題提起はそれぞれ異なるので、教員は事前にストーリーを視聴し、扱う生徒の年齢や学校の地域性を考慮してテーマを選択する必要がある。授業では、生徒達が動画を視聴し、オンライン上のフォーラム

（Schoolology）フォルダーの中に挙げられている質問に答えることから始める。

勤務校では、対象国の課題や情勢について調べ、グループごとに話し合う時間を設けている。さらに、問題解決する為にどうしたら良いかをまず自分たちで模索する。その後、自分の意見や感想をフォーラム（Schoolology）に投稿する。

フォーラムでは、同じ教材を学んだ他国の生徒とお互いに気づいたこと、学んだことを共有し、協働学習をすることによって、理解を深めていくことが出来る。生徒同士はフォーラムへの投稿だけでなく、写真やビデオレターの交換などが可能である。互いの時間の調整が出来れば Zoom などのオンライン会議を実施することも可能である。



3. 活動内容

活動内容として、勤務校の高校3年生の選択授業「国際理解」の授業実践を紹介する。2024年度は、28名の生徒がプロジェクトに参加した。この年度も昨年と同様に、海外在住歴のある生徒に加え、外国籍の生徒が半数以上を占めていたため、授業は英語と日本語のバイリンガルで進め

た。その結果、他国の生徒とのコミュニケーションもスムーズに行われた。

◆ホットシーティング

授業では、演劇的手法の「ホット・シーティング」を用いて、動画の主人公の境遇がより理解できるようにしている。「ホット・シーティング」とは、一人または複数の生徒が「登場人物の誰か」になりきって教室の前の“ホット・シート”と呼ばれる席に座って、ほかの生徒の質問に答えるという方法だ。この手法を用いることで、ホット・シートに座った生徒は与えられた役になりきり、実際に自分に起きた出来事として質問の答えを考えることになる。また、質問をする生徒たちも、どんな質問をすることがより学びが深まるかを考え、質問を考える。さらに、ホット・シートに座った生徒の異なる視点や考えを共有することによって、クラス全体の視野がより広がっていくことになる。

◆グループポエム

学習内容を表現するもう一つのツールとして「グループポエム」を行っている。この活動では5〜6人のグループに分かれ、英語と日本語を使いながら協力して1つの英語のポエムを創作する。今年度も5つのグループに分かれてポエムを作成し、それを他の人に伝えることを目的に発表の準備を進めた。単に読み合うのではなく、それぞれ工夫して発表するように指示しており、今年度は特に他国の生徒とも共有することを意識し、発表を動画に記録した。

左下の写真のように、5人の生徒がお互いに隣の生徒に語りかけるような口調でポエムを発表した。以下が生徒の作ったポエムである。



《Group Poem で発表する生徒》

Suma's Poem

Longing for education
But, forced into labour
Every day I slave away
Will I go home?
Is today the day?
Every day is the same,
Every day is torture
Will I be free?
Will I see my family again?
Every day we're alive
and overcome so many challenges
Wanting education,
in a fight to free other girls
Since books and friends walked into my life,
I now can glow like fireflies
So we'll grow in the future I escaped,
so you can do it too
Don't give up,
Never give up
Move towards the dream.

これら手法を通してより深く学んだ後、生徒はGirl Rising プロジェクトのフォーラムで自分たちの感想や意見を投稿した。そして、他国の生徒の投稿に対してコメントをしたり、質問をしたりすることで、さらに理解を深めていくことが出来た。

◆6カ国の協働学習

今年度は、6カ国（アゼルバイジャン、アメリカ合衆国、アルゼンチン、インド、ジョージアおよび日本）の高校生が共に協働学習を行った。2024年度から、このプロジェクトのファシリテーターとなったジョージアの教員と事前に連絡をとり、協働学習に参加を希望している他国の教員に2月頃から声をかけ、準備を開始した。

しかし、実際に各国の生徒がオンラインでの交流を開始したのは5月からである。それまでは、各教員がそれぞれの計画に従って授業を進めた。

今回はPadletを利用し、参加する生徒の自己紹介を始めに行った。これには、教員を含めて

2024 年度 JEARN 活動報告集

95 名が、Padlet 上に自分のロールモデル（尊敬する人）と将来の夢や活動してみたいことを共有した。多くの生徒達が自分の両親をロールモデルに挙げていることが興味深かった。また、多くの生徒が、将来は他者のために平和活動をしたいと書いていた。

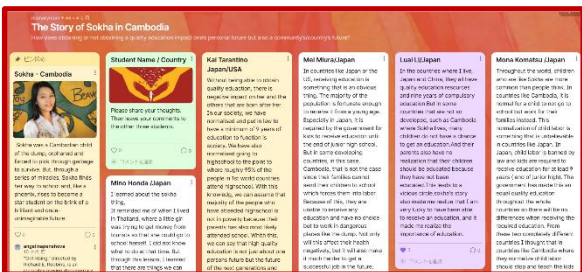
さらに今回交流する生徒の国をより理解できるように Padlet 上に他国の生徒に質問することができる Q&A を作成した。



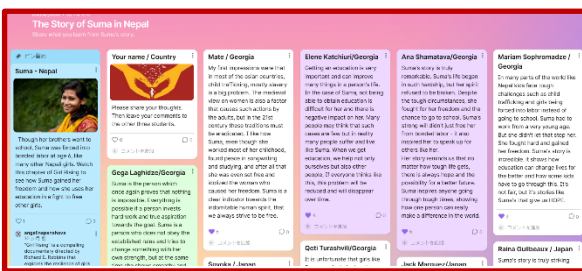
《他国へ Q&A Padlet》

この活動もお互いの国々について学び合う良い交流となった。

実際の Girl Rising の動画からは、全ての参加校の生徒がカンボジアの Sokha とネパールの Suma を視聴し、Padlet に学んだことを共有した。



《カンボジアの少女 Sokha の感想》



《ネパールの少女 Suma の感想》

生徒たちは、開発途上国では今もなお、女性であることを理由に、人権が侵害される文化や風習があることを再認識した。さらに、こうした問題は両親や周囲の人々が教育を受けていない環境で多く発生していることが分かった。しかし、そのような厳しい状況の中でも Suma を支える人々がいること、そして Suma 自身も逆境に屈せず

立ち向かい闘い続けていることを知り、生徒たちは勇気を持つことや行動することの大切さを学んだ。

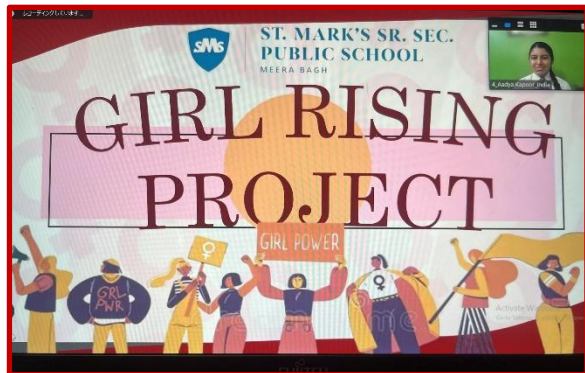
◆6 カ国オンライン国際会議

6 月 22 日（土）の日本時間午後 9 時より、協働学習をしている高校生と教員が“Pathway to Equality: Youth Engagement with Girl Rising”というテーマでオンライン会議を開催した。



《Zoom による 6 カ国オンライン会議》

司会はジョージアと勤務校の生徒が担当し、プログラムを進行した。まず、Padlet に投稿された Sokha と Suma についての生徒たちの感想をまとめて紹介した。続いて、ゲストスピーカーとして、元 Girl Rising プロジェクトのファシリテーターである Ed Gragert 氏と、モルディブの女性人権活動家である Dr. Aisha Rafia を招いた。その後、各国の学校が授業で作成した成果物を紹介が行われた。勤務校からは、全員が取り組んだ「Group Poem」の動画を発表した。他国の発表には調査結果であったり、劇によるものもあり、とてもクオリティが高かった。



《インドの高校生による劇の動画》

最後に、ブレイクアウトルームで各国の生徒が小グループに分かれ、学んだことや感想を共有した。

この会議を通じて、生徒たちは国境を越えて高校生同士が共に学び、行動することの重要性を改めて実感した。

◆動画作成

最後の成果プロジェクトとして、3年前から動画を作成に取り組んでいる。生徒たちは、授業を通して学んだことや自分たちに出来ることを表現活動として動画に盛り込んでいる。それぞれの動画には、授業で得た学びや他者に伝えたいメッセージが込められており、約4分の作品に仕上がっている。

今年度の生徒が作成した動画のテーマには、Girl Rising の少女たちが住む「カンボジア」や「ネパール」に加え、「イランの女性の人権」をテーマにしたグループもあった。テーマの選定や、分かりやすく他者に伝えるための内容を決める作業は簡単ではなかったが、それぞれのグループが創意工夫を凝らし、熱心に動画作りに取り組んでいた。

これらの動画は、3学期に行われた勤務校の英語・外国語スピーチコンテストのプログラム内でも紹介され、高校3年生からの大切なメッセージとして中高生全員に伝えることができた。さらに、iEARN の Collaboration Center にも投稿し、協働学習を行っている他国の教員や生徒とも共有した。



《生徒が作成した動画のワンシーン》

Girl Rising プロジェクトを通して、生徒たちは、国は異なっても共通して大切にしなければならない「人権」と「質の高い教育」の重要性を改めて確認することができた。さらに、世界の現状を広い視点で学び、実際の声に耳を傾けることの大切さも知った。加えて、学んだことを自分の中だけに留めるのではなく、周囲の人々に伝えることの重要性にも気づくことができた。

5 成果と課題

○成果

Girl Rising のムーブメントは、プロジェクトに参加する生徒たちが、力強い地球市民として成長するためのきっかけとなっている。生徒たちは共に学び合い、励まし合う仲間を得ることで、その意識をさらに深めている。

遠隔授業を通じて、各国の生徒たちは、同じ地球に生きる同世代の仲間として、SDGs「持続可能な開発目標」の「質の高い教育」と「ジェンダー平等の実現」に積極的に関わることの重要性を改めて認識することができた。

○課題

プロジェクトをスムーズに進めるためには、いくつかの課題がある。

まず、国際協働学習のプラットフォームである「Schoolology」の使用に関する問題がある。今回の協働学習に参加した教員からも、使い方が分からないという声があり、その結果、以前に比べて「Schoolology」に参加する教員が減少している状況がある。

次に、他のプロジェクトでも見られる共通の課題として、相手校とのスケジュール調整がある。プロジェクトを円滑に進めるためには、相手校の教員と事前に、開始時期や内容についてしっかりと打ち合わせを行う必要がある。

また、iEARNに加えて、WhatsApp や Messenger などの SNS を活用し、担当教員との密なコミュニケーションを取ることが重要だ。

さらに、生徒同士の学びを深めるためには、フォーラム上で感想を述べるだけでなく、自国の授業で学んだことを共有したり、他の生徒の意見に対して批判的に考察したりする力を育むことが重要だ。

加えて、見えてきた課題やその解決策を提案できる力を養うことも求められる。これらの力を身につけるために、教師は日々の授業で工夫を凝らし、生徒が主体的に考え、意見を深められるような指導を行うことが必要だ。

大学実践編 (含 Youth Project)

KOSKO Future Teachers Project の実践

～未来の教員たちによる国際グループの挑戦と課題②～

明治学院大学非常勤講師 長谷川早百合

小学校教員を目指す日本の大学生たちと KOSKO Future Teachers プロジェクトに参加した。日米の学生たちによる合同グループは「自閉症」をテーマに、社会の認識を変えるための Allies for Autism (自閉症支援者)「ストーリー」を共同制作した。学生たちは英語コミュニケーション力の向上と思考を深めながら国際協働力を身に付け、将来小学生に国際協働学習の機会を作ることへの肯定的な感想を抱いた。一方で国際グループ内での指導・支援をタイムリーに実施することへの課題があると再認識した。

Virtual Exchange 国際協働学習 教員養成 インクルーシブ教育 PBL

1. はじめに

iEARN の KOSKO Future Teachers (以下、FT) は、教員を目指す学生たちがグローバル教育ネットワークを通じて他国の「未来の教員たち」と対話ができる場を作ることにより、教室や学校を変えるビジョンを持つための一助とすることを目的としている (iEARN, 2024, p.40)。教育発達学科の英語の授業で小学校教員を目指す学生たちと 2020 年度より FT に参加してきた理由の一つは将来小学生たちの国際交流を志す先生が一人でも増えることを願ってのことだ。今回は 4 回目の参加 (1・2・3 回目は本レポート 2020・2021・2022 年度に報告済み) となるが、今年度もグローバル教育に関わるコミュニケーション科学と障害を専門とする米国大学の先生とパートナーを組み、日米国際協働学習を実践した。

2. 目的と方法

2-1 目的

教育現場で国際協働学習を導入する可能性を鑑み

1) 学生自らの国際協働学習体験を通じて、その成果として英語コミュニケーション力の向上と思考を深めながら国際的な協働力を身に付けることを目的とする。

2) 日本の小学校に国際協働学習を導入することについて考える機会を与える。

2-2 方法

1) 実施計画案

時期：2024 年度後期 (9 月末-12 月末)

授業：実践英語コミュニケーション 3B

授業時間：90 分×15 週 (交流期間は 11 週)

使用言語：英語 (必要に応じて日本語)

日米共通教材：①「自閉症の僕の七転び八起き」・Fall down 7 times get up 8 (東田直樹著・

英訳 David Mitchell)、②The Reason I Jump (ドキュメンタリー映画) ③Welcome to the Autistic Community (Chapter 2 - All about autism) 交流の場：zoom、FT 用 iEARN Collaboration Centre (CC)、各グループが決めた SNS など。

2) 内容項目

日本の学生 7 名と同じ教員を目指す米国の学生 20 名を 6 つの日米国際グループに分けた。

「自閉症」をテーマに、同じ本を読み、同じドキュメンタリーを視聴し、理解を深めて課題質問への意見交換をしながら社会の認識を変えるために自閉症の子供たちが日々どのように感じて暮らしているかを Allies for Autism (自閉症支援者)「ストーリー」として共同でまとめることを最終成果物とした。学習は下記 5 つの段階 (表 1 参照) に沿って実施した。

表 1 Allies for Autism プロジェクト段階

段階	実施項目 (タスク)
Phase 1	クラス紹介・自己紹介 (オンライン会議①+FT Forum 非同期交流)
Phase 2	自閉症の理解・課題共有 (オンライン会議②・図 1)
Phase 3	ストーリーボード成果物の作成 (国際グループ内対話)
Phase 4	ストーリーボード成果物の共有 (オンライン会議③)
Phase 5	プロジェクト振り返り+コメント (FT Forum 上)

3) 評価方法

学生たちの以下提出物を評価対象とする。

- ・学生の自作ポートフォリオ (振り返り含む)
- ・期末レポート (小学校導入への考察含む)

3. 活動内容・研究内容

3-1 Phase 1

日米学生たちが知り合うための準備としてク

ラスみんなで We are from...詩を相手の視点に立ちながら作った。オンライン会議①でお互いの We are from...詩を紹介し、その後プロジェクトグループに分かれて事前に準備した子供の頃の写真を使った自己紹介をし、今回の出会いの体験を FT 用 iEARN CC で共有しあった。

3-2 Phase 2

日米共通教材の①を日英両言語で読んだ。チャプターの一部を個々が選び、日英の違いを英語でまとめた。教材②は、視聴したのち7問の共通質問への答えを FT 用 iEARN CC に掲載し相手国の学生 2 名の答えを読んでコメントを書いた。その後オンライン会議②では、教材①の日英の違いを相手校にプレゼンし、相手校からは自閉症に関わる学びのプレゼンを受けた。グループ課題として社会の認識を変えるための Allies for Autism（自閉症支援者）「ストーリー」を最終成果物として共同制作することを伝えた。

3-3 Phase 3

各グループがストーリーの作成段階に入った。毎週の授業では近況報告の共有に徹し、教材③のリーディングを続けた。



図1 オンライン会議③

3-4 Phase 4

オンライン会議③（図①）で各グループが最終成果物としてストーリーボードを用いてストーリーを共有し（図2）「解決したい問題点」「メッセージの狙い」「どの登場人物の想いを反映させたか（教材②）」「どこで使いたいか」を各グループのメンバー1人1人が説明した。

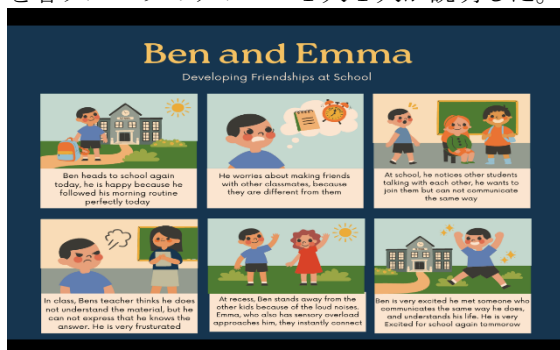


図2 最終成果物の「ストーリー」例

3-5 Phase 5

FT 用 iEARN CC を通じて日米学生たちは今

回の相互文化的教育プロジェクトへの①評価、②驚いた点、③学生、未来の教員、グローバル市民として今後やりたいことを振り返りとして共有しお互いの考えを読み合ってコメントを残して終わりとした。

4. 成果と課題

○成果

- ・英語コミュニケーションにあたり、英語を対話のために使う経験がほとんどなかった学生たちは初めて緊張していた。今回のトピックであるコミュニケーション上困難を抱える自閉症の人について学びながら「自分とは違う言語を扱う他者」（米国の学生たち）とのプロジェクトを通じてコミュニケーションに対する新たな視点を持つようになった。「違う母語でも学びたい意志があれば上手くいく」ことに驚き「文法より大切なのは通じ合いたいという気持ちだと気づいた」と振り返っている。

- ・教育発達学科の学生たちは自閉症についての予備知識を活かし、translanguaging の発想で取り入れた日本語の本とその英訳本と日本語の字幕が出る英語ドキュメンタリーを教材としたこともあり、彼らの質問課題へは深く考察されていた。

- ・国際協働力については、成果物をグループで仕上げ、そのプレゼンを仲間とともに堂々と英語で行っていた学生たちの姿が印象的だった。

- ・日本の小学校の国際協働学習導入に関しては、形を変えながらもその意義に共感し教員になった時導入したいと肯定的だった。

○課題

- ・グループ内で協働学習を進める際、SNS など教員たちが含まれないやり取りがあり支援・指導するのが難しくなる。毎週授業の近況報告は欠かさず、パートナーの先生とも活動期間中連絡を密に取り合ったが、それでも最終成果物作成段階で意思疎通の破断が起きていたグループがあった。最終的にはトラブルは修復され無事プレゼンも間に合ったが学生たちには事前にコミュニケーションブレイクダウンが起こりうることを伝え、その修復時にこそ学びがあると伝え続けることが重要だと考える。

- ・FT 参加への課題は、毎年新しい先生と組む可能性があり不安定であること。筆者は同じ大学の先生と 4 回も組むことができたが次年度組むことを約束してきたわけではない。それでも FT プロジェクトのビジョンを共有する海外の先生と協働で課題を作り、実践することは楽しみであり、来年度も参加の機会を検討したい。

参考文献

iEARN.(2024). iEARN Project Book 2024-2025. https://iearn.org/assets/resources/iEARN-Project-Book-2024-25_Final.pdf

小学校国際協働学習(TBP)を支援する大学生の関わり

～ユースプロジェクトとして大学生の学び～

金沢星稜大学 清水和久

2024年度清水ゼミの学生は、日本の小学校4校11クラス+1地域と台湾の小学校4校11クラスとの国際協働学習の支援を行った。支援内容は8つ、1)導入時の「100人村」ワークショップ、2)地域の子供のためのワークショップの開催、3)日本と台湾の教師間のLINEグループでの支援、4)児童間の交流用としてPadletの運用、5)zoom会議支援、6)大学生による台湾の交流小学校への代理訪問、7)帰国後の小学校での台湾報告会(360度映像の活用)、8)月1回の大学生と日本の先生との情報交換会。これらの8つの活動を通して小学校国際協働学習の支援を行った。

国際協働学習 テディベアプロジェクト 台湾 360度カメラ VR ゴーグル

1. はじめに

毎年、金沢星稜大学の清水ゼミの3回生が、**JEARN**^{*1}のユースプロジェクトの一環としてテディベアプロジェクトに参加する小学校の支援を行っている。毎年の**TBP**（テディベアプロジェクト）のルーチンワークの他に、今年度特に力を入れたことは、1番目として小学校だけではなく、地域の子供会を巻き込んでのワークショップ形式の**TBP**を実施できたこと。2番目として台湾から帰国後の報告会の内容の工夫である。学生の台湾訪問時に360度カメラで交流校の様子を撮影したものを、日本の児童に**VR**ゴーグルを活用して視聴させることができたこと。3番目に2校7クラスの小学生にアンケートをとり、児童の生の反応を得たことである。外部の者が直接児童にアンケートをとることは難しいが、今回はそのデータをとることができた。

学校の多忙化にともない、外国の交流相手校と時間をかけながら行う国際交流プロジェクトは実施が難しくなっている。しかし、小学校での外国語の教科化などで、英語を使う必要を感じさせる場も必要となっており、このような状況下で、膨大な労力をかけず、且つ自分のクラスの裁量である程度進めることができるプロジェクトが必要とされる。

TBP は、自分たちの代表としてぬいぐるみを送り、交流校からも送ってもらい、互いのぬいぐるみの滞在記を通して地域紹介や異文化理解を図るプロジェクトである。

ぬいぐるみを交換留学させたあとは、そのぬいぐるみを通しての活動となり、ある程度活動は自校に任されており、過密な日本の教育カリキュラムの中でも、交換後の活動は、各校のカリキュラムの中に組み入れることは容易である。

2. 目的と方法

2-1 目的

日本と台湾の小学校との国際協働学習である TBP に大学生が関わり、両国の先生同士の交流を支援することで、大学生自体の学びと日本の小学校側（教師と児童）の学びを明らかにする。

2-2 方法 8つの活動ステップ

1) 大学生と小学校との関わり

大学と小学校との関係図（2024年度）

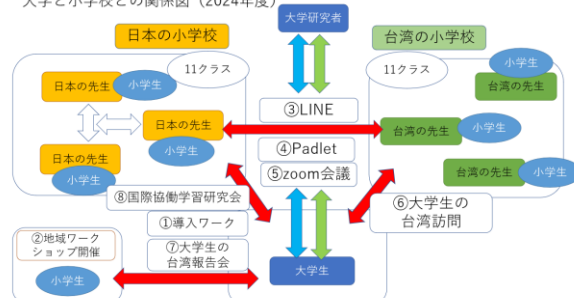


図1 大学生の支援構造図

関わりの支援内容

① プロジェクト導入授業の実施

世界に対する関心を小学生に持ってもらうための大学生のワークショップの実施

② 地域の小学生とのワークショップの実施

小学校単位でなく、地域のワークショップとして TBP の模擬体験の実施

③ 教師間の日常的 LINE グループでの支援

日本と台湾のクラスごとのグループ LINE を作成し情報交換の場とし、担当の大学生も 1 名ずつ参加

④ Padlet (掲示板の活用)

ベアの日々の滞在の様子を伝えるために活用。担当クラスの大學生が管理を行う

⑤ Zoom 会議支援

少人数 Zoom 会議では、会の進行支援を行うが、あくまでも。

⑥ 学生による台湾の交流校への訪問

台湾の交流校に日本の小学生のクリスマスカードを届けるとともに、現地校を360度カメラで撮影する。

⑦ 日本の小学校への台湾報告会の開催

台湾の訪問の様子をより理解してもらうためのワークショップの実施。VRゴーグルを通して台湾で撮影した360度動画の視聴。

⑧ 日本の先生と学生とのzoom会議

プロジェクト参加の日本の先生と、清水ゼミの学生（7人）は筆者も含めて月1回zoom会議を持ち進捗状況の報告や課題についての情報交換会を実施

2) 活動計画

表1 基本的な年間活動日程

月	小学校児童の意識	教師の動き	研究会の内容
4月	学習の見直しを持つ	国際協働学習の動機づけ	⑧月1回のzoom研究会
5月	交流相手の台湾について知る		第1回目 顔合わせ
6月	①100人村ワーク体験	③交流校とLINEグループ作成	発信情報の蓄積方法の共有
7月	発信内容の調査	地域情報の蓄積	
9月	ペアの性格付けをして送付準備	台湾の交流児童との組み合わせ決定	第2回目：送り方見直し
10月	台湾からペアの到着 ④ Padletの活用	②地域ワークショップ ペアとの活動の話し合い	第3回目：ペアの活用法
11月	⑤zoom会議1 自己紹介	TV会議練習 大学生を練習相手に	第4回目：課題と解決方法
12月	⑥大学生の台湾訪問 X'マスカード交換	英語のカード作成	第5回目 SDGsのテーマ
1月	zoom会議2 発表会	SDGs関係の内容について	
2月	⑦大学生の報告会ペアの返却と帰国	振り返り	第6回目：振り返り

TBPの交流スケジュール



図2 年間計画の進行図

3) アンケート調査と結果

・児童に対する調査（7クラス162人）

3. 活動内容

以下支援内容について時系列に沿って述べる。

3-1 プロジェクト導入授業の実施

小学生が国際的なことに興味を持てるようにするために導入授業として「世界がもし100人の村だったら」*2のワークショップを大学生が小学校への出前授業としておこなった今年度は4

校で実施。大学生は、国際状況を学習したうえで、小学生に訴えたいものを決め、いろいろな国の服装を身につけて、世界の富の偏りや識字率の問題などをクイズ形式でおこなった。参加する小学生は世界の住民になって指示に従って動く体験型のワークショップである。



図3 100人村のスライドの1部

学生の似顔絵をbitmoji*3のアプリで作成しスライドの中で使うことで、親しみやすくしている。世界で話される言語の種類としては人口の多い中国で話される中国語が一番多いのであるが、学校で学ばれる言語も入ると英語が一番多くなる事実から、英語の必要性を理解してもらう。また、富の偏在では、平等に分配すれば、富はいきわたるのに、人口の20%の人が世界の富の8割を所有していることを学び、知ることの重要性を訴えた。このワークショップをきっかけに、児童に世界のことを知る重要性を理解し、実際に台湾の小学校との国際交流のスタートとした。小学校4校でTBPは実施できた。

3-2 地域TBPワークショップの開催



図4 志賀町でのワークショップの開催

小学校単位で行うのではなく、国際協働学習やICTに興味のある地域の児童を集め、現地の組織「くまの地域づくり協議会」との共催で年3回のワークショップ（TBP及び小学校英語）を計画。（残念ながら3回目は大雪のため中止）

1回目 TBPワークショップ

2回目 英語を使ったクリスマスカード作り

3回目 台湾報告会（大雪のため中止）

内容

1回目：台湾用ペアの準備と台湾の情報収集

- ・テディベアの自己紹介カードの作成
- ・台湾の観光地を巡るドローン操作体験
- ・VRゴーグルで台湾旅行の体験。

2 回目 クリスマス会

・台湾の児童へ送るクリスマスカードの作成と英語のゲーム（本大学で実施）

3 回目 台湾報告会（大雪のため中止）

・台湾での大学生の体験をクイズで紹介
・録画してきた VR 映像の体験

これまでは学校単位の TBP への支援であったが、今年は地域の子供会でのワークショップを実施、地域ベースでのワークショップ開催の可能性も感じる事ができた。

3-3 台湾の先生との LINE グループでの支援

LINE は日常的に台湾でも使われており、先生同士の情報交換では使いやすい。言語の問題は LINE に中国語の繁体語のアプリを参加させることで、日本語と中国語（繁体語）の翻訳がスムーズになった。また日本と台湾の LINE のグループに学生と研究者も参加することで、交流の進行具合を把握できる。学生の役割は、書き込みがあった場合に、忙しい先生の代わりにすぐその内容に反応して、会話がスムーズに進むようにすることである。

3-4 Padlet の活用

LINE は先生同士の連絡に日常的に使えて便利であるが、それだけでは児童が相手とつながっている感じを持つことができない。そこで、互いの国の児童同士は、送られたきたテディベアの滞在の様子などを写真にとって交流のために使用した。ここでも大学生が Padlet の管理を行い、メニューやスレッドを立てて、互いの児童の書き込みを支援した。



図5 Padlet による交流の様子

3-5 少人数 zoom 会議での支援

Zoom 会議の、1 回目の自己紹介は小グループ対小グループで行った。高学年は週 2 回の英語があり、5 年生はユニット①“Hello friends”で、6 年はユニット①“This is me”で自己紹介を英語で各単元があるが、これを実際に台湾の児童と小グループで言い合う場面とした。クラス対クラスの全体 zoom では、なかなかやりにくいが、小グループならではの自由にやり取りを行うことができた。タブレット PC を使うことで、写真なども活用できるので、アドリブでも臆せず会話を進めていた。すべてのグループに教員が同

時に付くことはできないので、学生が遠隔で zoom に入り、会話が止まっているところには、「どちらの発言の番か」などを確かめて話を進めるようにアドバイスした。

小学校高学年では

3-6 大学生の台湾訪問

3-4-1 台湾の小学校 4 校への訪問

2024 年度は筆者のゼミ生 7 人が台湾を訪問。9 日間の日程（12 月 27 日～1 月 4 日）台湾の正月は 2 月のため、元旦以外は学校で授業がある。

表 2 台湾の小学校訪問日程

日	内容	備考
12/28	移動日	前日 金沢→大阪（泊） 関空→台湾桃園空港
12/29	台北市	九份・十分探索
12/30	台北市	・五常小訪問・授業参観
12/31	台北市	日新小教諭との昼食会 年越しイベント
1/1	嘉義市	移動日
1/2	嘉義市	・精忠小訪問・授業参観 ・宣信小訪問・授業参観
1/3	高雄市	・新甲小訪問・授業参観
1/4	高雄市	旗津島、高雄港探索
1/5	移動日	桃園空港→関空→金沢

○1 校目 五常小学校（12 月 30 日）

五常小は台北市にあり 1 校 2000 人規模の大きな学校である。この小学校との交流支援は 5 年前から行っており、国際交流を学校の特色の 1 つとして打ち出している。交流校に学生が入り、日本文化の紹介や、日本の小学校から頼まれた質問などを行った

表 3 五常小訪問日程

	内容	詳細
1	会議 自己紹介	児童による学校紹介
2	6 年 2 組参観	日本紹介と活動
3	6 年 4 組 5 年 2 組参観	日本紹介と活動
4	図工授業参観 昼食	正月飾りの作成
5	会議 (感想交換)	学生の感想、及び、質問などの意見交換



図6 五常小の教室で日本紹介をする学生

○第 2 校目 嘉義市精忠小学校（1 月 2 日午前）



図7 精忠小 カラフルなデザインが特徴
この学校ともずっと TBP を行っている、学年 2 クラス嘉儀市では小規模な学校ではあるが、毎回歓待してくれる。この学校の 5, 6 年の 4 クラスと交流を行っている。

表4 嘉儀市精忠小学校訪問日程

時間	活動内容	協助人員/備註
8:50-9:20	接待準備 - 清水教授と助教抵達後前往校長室。 - 實習教師前往四樓會議室放置個人物品。	淑玲老師、洪佳好老師、雅蓮老師協助接待及翻譯。
9:20-9:30	入班準備 - 實習教師依活動安排準備進入班級。	洪佳好老師、雅蓮老師協助翻譯；淑玲老師巡視各班並協助翻譯工作。
9:30-10:10	班級交流活動 - 日本實習教師與五、六年級學生進行互动交流。	
10:30-11:10	觀課活動 - 清水教授與助教分為兩組，參觀五乙英語課與三甲雙語體育課（輪流進行）。	淑玲老師與洪佳好老師各協助一組進行翻譯工作。
11:20-12:00	交流座談會與校園導覽 - 與實習教師進行交流座談會，並導覽國小部校園環境。	雅蓮老師協助姊妹校簡報分享，淑玲老師協助座談翻譯。
12:00-12:40	午餐時間 - 實習教師依分組至各班用餐。 - 清水教授與助教在校長室享用午餐	午餐秘書協助提供日本師生及翻譯教師餐具和餐盤。
12:40-13:00	移動行程 - 從精忠國小出發，前往宣信國小參訪下一行程。	楊校長、蔡主任及正偉老師協助交通接送



図8 バイリンガル体育の授業

嘉儀市ではバイリンガル教育がされていた。ここでは嘉儀大学の大学院で学んでいる学生が、小学校の体育でヨガを教えていた。指示は英語である。体育は体を動かすので英語の指示が十分わからなくても、まねすることで可能である。嘉儀市では、外国籍の留学生を積極的に活用しており、小学校でバイリンガルの授業に採用しているそうである。いろいろな国の英語を聞かせることで、共通語としての英語の重要性を感じることができる。英語を使ったバイリンガル教育は、体育、音楽、図工などのから 1 科目選んで学校裁量で行っている。学生も体育の授業に混ぜてもらって授業を受けた。指示は英語であるが、体育なのでわかりやすい。

○第3校目 嘉儀市宣信小学校（1月2日午後）



図9 荘厳な宣信小の玄関

この学校は白熊をモチーフとした有名なイラストレータ「莊信棠」（SMART）を輩出した学校で、学校の中にも「沉睡大白熊」をモチーフにしたデザインされたトイレがあり、各階ごとに春夏秋冬の森林を表している。



図10 白熊の絵のあるトイレ

表5 嘉儀市宣信小学校訪問日程

	内容	詳細
13:40-14:20	交流クラス プレゼン	3クラス
14:20-15:00	英語の授業参観	フォニックス
15:00-15:30	児童による英語での スクールツアー	学校の周囲のモニュメント

児童が日本の学生に対して英語で学校の周囲にあるモニュメントの説明を行った。この学校は昔の競馬場の跡地にあり、馬に関するモニュメントが残されている。地域とのつながりを児童が説明できるようにしていることは、地域を愛する心を育てている上で重要であり、英語で説明することで外国の訪問客へのアピールになるので、日本でも見習いたい場面である。



図11 英語でモニュメントの前で説明する児童
○第4校目 高雄市新甲小学校（1月3日）



図 12 新甲小学校の門

台湾の南部の高雄市にある小学校、日本だけでなく、いろいろな国と交流をしている。クリスマスの英語のダンスで迎えてくれた。この小学校も毎年温かく迎えてくれる学校である。

表 6 高雄市新甲小訪問日程

	内容	詳細
12:00	昼食会	
13:00	校内紹介	ダンス紹介
14:00	交流授業	1 クラス
16:00	博物館見学	

どの小学校でも歓迎され、台湾の小学校英語の授業にも実際に参観することができた。台湾では英語は専科が教えており、週 3 時間の授業が行われていた。これから小学校教員を目指す大学生にとっても参考になるものであった。

3-7 台湾報告会



図 13 台湾の 360 度映像を視聴する児童

日本に帰国後、大学生は、台湾の小学校の様子を伝える報告会を行った。大学生は 1 人が 1 つのクラスを担当しており、日本の各クラスで、台湾クイズを実施。昼食後の午睡の話や、給食の内容などについてクイズ形式で報告を行った。また、時間が取れるクラスでは、台湾で撮影してきた 360 度映像を VR ゴーグルで視聴する機会も持った。360 度映像は YouTube にアップしたものを視聴してもらった。交流校の玄関から入っていく動画などを視聴することによって、まさに訪問した気持ちになれるので、児童は歓声を上げていた。また、台湾の年越しの花火や有名な観光地九分、十分もメニューに加えた。

3-8 日本の先生と学生との zoom 会議

国際交流が初めての先生もいるので、交流期間中以下の 6 回の会議を持った。

- 1 回目 5 月 顔合わせ会
- 2 回目 9 月 ベアの郵送について
- 3 回目 10 月 ベアを使った滞在記
- 4 回目 11 月 zoom 会議ノウハウ
- 5 回目 12 月 交流の課題について
- 6 回目 2 月 まとめ

先生方の負担を考えて、管理職に許可をもらって、16 時から 1 時間の勤務時間内の開催とした。本来は TBP に参加しているすべての先生に参加していただきたかったが、多忙の折毎回の参加者は学校から 1 名のことが多かった。

4 活動の評価（児童のアンケートより）

4-1 児童アンケート（2 校 7 クラス n=162）

方法：選択肢から複数回答を選択（数字は%）

① 「100 人村ワーク後の気持ちは？」

- ・世界の問題についてもっと知りたい (63%)
- ・英語を学ぶことは大切・必要 (53%)
- ・世界の問題を協力して解決する必要 (50%)
- ・日本の良さに気づいた (47%)
- ・もっと英語を学びたくなった (30%)

100 人村を行うことで世界の事に興味を持ち、英語が必要だと感じる事ができているが、まだ、英語を積極的に学びたいという意欲までにはつながっていない。開発途上国の子供たちの環境を知ることによって日本の良さについて気づいている。

② 「台湾との zoom 会議後の気持ちは？」

各項目を 4 件法で聞き、上位プラス評価の割合

- ・相手の文化を知れてよかった (94%)
- ・コミュニケーションが取れて楽しい (94%)
- ・相手の反応が見られておもしろかつ (93%)
- ・自分の英語が伝わってよかった。 (88%)
- ・英語を話す自信がついた (75%)
- ・英語が伝わらなくて悔しい (54%)
- ・相手の英語が理解できなくて悔しい (56%)

zoom を小グループで行い、タブレットも使って自由に交流を行うことで、自分の意思を伝え、相手の考えを知ることにつながった。コミュニケーション自体を楽しみ、英語を話すことに自信を持てた子が多い。

③ 「台湾との zoom 交流の満足度は？」

- ・とても満足 (38%)
- ・満足 (49%)
- ・どちらかというと満足 (10%)
- ・どちらかというと不満足 (3%)

3 つを合わせたプラス評価は合計 97% であり、zoom 会議の満足度は極めて高い。

④ 「交流でやってよかった活動は？」

7 つの活動の項目から複数選択

- ・zoom での会話 (69%)
- ・ぬいぐるみの交換 (51%)
- ・100 人村のワーク (50%)
- ・大学生による台湾報告会 (46%)

- ・台湾の VR 視聴体験 (46%)
- ・カードの交換 (44%)
- ・交流相手へのカード作り (39%)

Zoom での交流の印象が最も強い。また、送られてきたぬいぐるみが教室にいて相手に意識することができたと思われる。

⑤「交流を通して感じたことは？」

各項目についての 4 件法で選択し、上位 2 つのプラス評価の合計の % の項目の上位順

- ・英語の大切を感じた (94%)
- ・台湾の子供たちとつながりを感じた (93%)
- ・英語を学んでよかった (92%)
- ・英語をもっと話せるようになりたい (90%)
- ・自国の良さがわかった (90%)
- ・自国の良さを外国に伝えたい (90%)
- ・外国の文化や問題について知りたい (88%)
- ・世界のために行動したい (86%)
- ・台湾との交流は自分の役に立つ (85%)
- ・海外に行ってみよう (77%)

台湾の児童との交流に習っている英語が必要だと強く感じていることがわかる。この交流で英語に対する興味関心を高めることができると思われる。

⑥「交流を通して自分に着いた力は？」

8 つの選択肢から選ぶ（複数回答可）

- ・積極的なコミュニケーション力 (67%)
- ・英語を話す力 (65%)
- ・伝わるように自分を表現する力 (60%)
- ・異なる国の人と協力する力 (55%)
- ・多様な価値を受け入れ尊重する力 (43%)
- ・世界の出来事を自分事と考える (36%)
- ・様々な視点から物事を見る (32%)
- ・課題を見つけ解決する力 (30%)

自己評価ではあるが、コミュニケーションには自信を持った児童が多いことがわかる

5. まとめ

4-1 支援にかかわった学生の観点から

今回の交流のメインの役割を担った 3 年生は、6 月から小学校へ出向いてのワークショップから始まり、台湾と日本の先生との LINE グループで交流の動向をサポートし、Padlet を使った児童同士の掲示板づくり、台湾と日本の子ども同士の WEB 会議にもネット上で立ち会い、12 月末に台湾の交流校を訪れて、ずっとサポートしてきた台湾の子供たちにメッセージを伝えた。また、帰国後は自分の経験をまとめ日本子どもたちに、伝えることができた。これからの教員として歩む上での大きな自信につながったはずである。

実際、台湾に行き、台湾の実用的な英語教育の先進性を感じた学生が多かったようである。また 3 年生は海外旅行が初めての学生が多く、

プレッシャーを感じる中で同行したメンバーとの協力体制の重要性を感じたようである。台湾の一般教員は異動希望を出さない限り同じ学校に勤め続けることが多く、今回のつながりが、教員になってからの国際交流につながる可能性も高い。また教員になった時に子供たちに台湾のことを話せる生きた教材となる。

表 7 項目別大学生と小学生・担任の学び

	項目	支援を行った学生の学び	小学校側の学び (教師、児童)
1	100 人村ワーク	・国際情勢の理解 ・ワークショップの企画力 ・児童の前で演技する力	・国際情勢の理解 ・英語の必要性の理解 ・外国への興味の拡大
2	地域ワークショップ	・TBP を説明する力 ・TBP のワークショップの実施力	・英語への興味 ・ICT を活用した交流のイメージ化
3	教師間の LINE の会話	・交流の進行状況の把握 ・会話に対する反応力 ・スムーズな交流の進め方	・日常的に日本の教師が外国の教師と協働する力 ・外国に対する発信力
4	児童間の Padlet の交流	・掲示板の立ち上げ方とスレッドの立て方など ・掲示板の運用力	・ベアの日々の様子を写真でアップする発信力 ・相手の情報を受信する力
5	Zoom 支援	・zoom での支援的立場からの介入の方法 ・日程調整力	・タブレットの活用 ・児童が臨機応変に zoom 会議を進行する力
6	台湾への訪問	・日本文化のプレゼン力 ・外国の地での対応力 ・360 度動画の編集力 ・対面での英語の会話力	・台湾に行く学生に託すミッションの作成 ・台湾への興味の拡大
7	台湾報告会	・台湾紹介のプレゼン力 ・VR ゴーグルの視聴の仕方の説明	・大学生の台湾の話の理解 ・VR ゴーグルでの台湾訪問疑似体験
8	月 1 の会合	・担当の校先生との良好な関係 ・担任との打ち合わせ	教師側 ・台湾との交流の見通し ・クラス活動の見通し

4-2 全体を通して

小学校においても、学んだ英語を必然性のある環境で使って自分の意思を相手に伝え、相手の意図をくみ取る力は重要になってくる。

またオンラインの国際交流を補完するものとして、実際に相手を実感できる物（ぬいぐるみ等）が必要であり、自分の思いを託せる人（大学生）の直接交流体験を聞くことで間接的に異文化理解の質を高めることにつながると感じた。

教員を目指す大学生が国際協働学習（TBP）を実施するための 8 つのステップの支援を体験できた。特に大学生自身が小学生の代理として台湾の交流校に出向き、台湾の小学校の授業に参画し、台湾の小学生及び教師と交流した体験を日本の小学生に伝えるということは、日本の小学生に対して生きた国際協働学習の教材の提供につながり、学生自身が教師になった時にも役立つ経験となると思われる。

参考文献

- 1) JEARN <https://www.jearn.jp/>
- 2) 「ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら」第 6 版 開発教育協会 2020
- 3) bitmoji <https://www.bitmoji.com/>

国際協働学習 iEARN レポート

2025 年 6 月 1 日発行

出版元 NPO 法人 JEARN

<https://jean.jp/iearn-report/index.html>

ISSN 2434-0049